銀幕迷宮

〈キネマ ラビリンス〉

改訂新版

作／小松杏里

【登場人物】

カワシマ
妻・ヤエ

マダム・桐子
ホステス・みつこ
ホステス・マキ
ホステス・民子
バーテン・矢崎

助監督・藤村
雑誌記者・沖田

女優・山尾　雅
付き人・佐久間
監督・但馬健吉
俳優・小田庄助

折居
迷宮売り

少年時代のカワシマ
母・タケ
兄・敏次
姉・セツ

少女

箱舟迷宮商会の人々・鏡売り
猫の目売り
花火売り
不思議売り

撮影所の人たち
〈ラビリンス〉の客たち
学生服姿の少年たち
映画の思い出を語る人々

亡霊たち
黒衣たち

序　どこかに魔物が棲んでいる

その《劇場》は、あるひとつの心象風景に似た、荒涼とした世界によって支配されている。
老人の肌のようにカサカサとして、時折、砂煙が舞い上がるほどの真っ白な岩肌。
地熱にただれた熔岩があり、瓦礫の間からは亜硫酸ガスが噴き出している。
辺りに漂う硫黄の匂いと、黄色く澱んで鈍い光を放つ地獄池。
石塔や卒塔婆が立ち並び、どこからともなくイタコの口寄せのような声が聞こえてくる。
誰も見たことのない《風》が、その間を元気に走り回っている。
そこは紛れもなく、青森県下北半島・恐山であった。

今しもあちらこちらから、この世のものではない魔物たちが現れ出そうな雰囲気のなか、次々と観客たちが席へと誘導されてゆく。
席に誘導するのは、恐山のイタコであったり、黒衣の角巻きの男女たちである。
すべては、ひとつの《儀式》として執り行われているかのようである。

やがて、観客たちもその心象風景に納まり、辺りは次第に闇に覆われてゆく。
そして、《風》がその動きをピタリと止め、どこからともなく、声が響く。

「背のびして　ミューズの蹠を　くすぐらむ」

1　迷宮幽閉

一瞬の静寂の後、「ヨーイ、スタート！」の声がかかり、映画のカチンコが鳴る。
と、同時にそこは、虹の都・光の港、華やかなる映画の撮影所となる。
すると、今まで恐山の風景に見えていたものが、実は映画のセットであり、イタコや角巻きたちは、役者やスタッフであることがわかる。

そこでは、映画製作に従事しているありとあらゆる人々や、撮影所を訪れた人たちが活発に動き回っており、誰の顔もみな一様に生き生きと輝いている。
すなわち、美術、衣装、大道具係の人たち、食堂の出前持ち、照明のスタッフ、女優とマネージャー、時代劇の衣装で自転車に乗っている役者、着ぐるみ（怪獣など）を着て顔だけを出しているスーツアクター、スターのサインを欲しがっている見学者、守衛さんなどなど。
また、片隅では、映画の撮影（スーツ姿の二枚目男優・看護婦姿の美人女優・監督・カメラマン・スクリプター・音響係・女優の付き人）も行なわれている。

その喧騒と離れたところに、ひとりの男がいた。
右肩下がりの背広姿のその男は、よく見ると足が悪いらしい。
僅かに右足を引き摺りながら、男はゆっくりと中央に歩いてくる。
唇を突き出したその独特の表情は、酔っているようにも見える。

男　……ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例（ためし）なし。か……

――『方丈記』ですね。鴨長明。

後ろから声がし、男が振り向くと、ひとりの少女が立っていた。

少女　カワシマさん……映画監督のカワシマさんですね？
カワシマと呼ばれた男　そうだが、君は？
少女　あたし、女優に、映画女優になりたいんです。
カワシマ　（含み笑い）そういう話だったら、私にいってもムダというもんです。
少女　でも、あたし、カワシマさんの映画に出たいんです。
カワシマ　私の映画に？　それは光栄の至りですな、お嬢さん。しかし、映画のキャスティング、つまり、配役のことだが、そういうことは私ひとりじゃ決められません。というのもつまり、映画にはプロデューサーという製作的な面での最高責任者がいましてね、その人間がすべてを取り仕切っている。監督なんてのも使われる立場にあるんです。普通の会社員と同じなんですよ。（自虐的な笑いを浮かべる）

少女　それは違うんじゃないかしら？

カワシマ　違う？　何が、何が違うもんですか！　（まるで少女に絡むかのように興奮して、少し吃りがちになり）私だって時には撮りたくもない映画を撮らなきゃならないことだってあるんだ。なぜだかわかりますか？　セイカツのためです。食いつないでいくためには、上から押しつけられたイヤな仕事でもやらにゃならんのです！　……すみません、お嬢さん。あなたにこんなことをいっても仕方がないですね。

少女　……でも、あなたは違う。

カワシマ　（自分を卑下したように笑って）違うもんか！　そりゃ確かに人は私のことを奇才だとかいってホメタタエテはくれる。しかし、それはもう私の手を離れて出来上がってしまった作品に対してだ。過去のことです。過去というものは恥ずかしいもんです。ましてや私がイヤイヤやった仕事を、イイなんていわれたら、どうすりゃいいんです？

少女　……酔ってらっしゃるのね。

カワシマ　酔ってる？　この私が？　ふ、ふ、ふ……確かに酔ってるかもしれませんな。しかし、それは断じてアルコールにではない。いくらなんでも撮影所に来てまで、酔いどれ船の乗組員を気取っているわけにはいきませんからね。私が酔っているのは、この、自分に対してです。映画に酔っているのでもない。自分の、この心地よい疲れに対して、そう、私は確かに酔っているのかもしれない……（独特の自虐的な笑い）

少女　……ナルシスティックでマゾヒスティック。あなたは、道化ね。

カワシマ　道化？　クラウンですか？

少女　自分を苦しめて楽しんでいる。

カワシマ　そんなことはない。

少女　ご存知？　道化はなぜあんなメイクをしているのか。道化は昔、犠牲として捧げられる役目を背負っていた。だからいつ殺されるかわからない。その悲しみを隠すために、白塗りをして、赤い鼻をつけて……

カワシマ　私は道化ではない！　……いや、もしかしたら道化になりたかったのかもしれない。だが、なれるわけがない。私が道化を演じたとしても、誰も笑っちゃくれません。むしろ、同情と哀れみを誘うだけです……それじゃ。（と、去ろうとする）

少女　……あなたは、もうすぐ死ぬわ。

カワシマ　（驚いて振り向き）死ぬ？　どういうことです？

少女　あなたの作り上げたひとつの歴史が、終わりを告げるのよ、カワシマさん。滅びるの、何もかも。

カワシマ　……この、この身体(からだ)か？　この身体が……君は誰なんだ？　女優になりたいなんて、そんな嘘までついて、私に何をいいたいんだ！

少女　いいえ、嘘じゃないわ、本当のことよ。映画女優になりたいの、主演でね。あなたの最後の映画(キネマ)のヒロインに。

カワシマ　私の、最後の映画(キネマ)？

辺りの様子が次第に変貌してゆく。
風が強くなり、不気味な闇が支配し始める。
そして、どこからかチラチラと雪が……

少女　……旅に病んで、夢は枯野をかけめぐる……

カワシマ　……ここはどこなんだ？　撮影所じゃない……君は、いったい誰なんだ？

少女　わたしはあなたの夢心(ゆめごころ)。そしてここは、あなたの帰り着くところ……

もの凄い風とともに、そこは一瞬にして再び下北半島・恐山となる。
岩肌が青白く輝き、澱んだ空気の中、カラスの鳴き声が響き渡る。
少女が笑い声をあげながら恐山の風景のなかに消えてゆくと共に、あちらこちらから、カワシマ最後の映画の登場人物とも思われる人々が現れ出てくる。
彼らは口々に《旅に病んで、夢は枯野をかけめぐる》と、くり返しながらカワシマに近づいてくる。
そして、哄笑。

悪夢を振り払うかのように暴れているカワシマを残して、暗転。

2　怖畏(ふい)の湖(うみ)

どこからか聞こえてくるシャンソンの歌声。越路吹雪である。

次第に辺りが明るくなると、そこはカワシマ行きつけの銀座のバー〈ラビリンス〉であることがわかる。
客（2人）とホステスたち（みつこ・マキ・民子）、そして、カウンターの中にバーテン（谷地）がいる。
季節はもうすぐ春だというのに、店の外では雪がぱらついている。
カワシマは、酔って暴れた後フロアに坐りこんだように、息を荒くしたままブツブツと何事かをいっている。

カワシマ　……ひとの世の旅路のなかば、ふと気がつくと、私は正しき道を見失い、暗い森に迷い込んでいた。その森の凄さ、こごしさ、荒涼ぶりを語ることは、げに難(がた)い。思い返すだけでも、その時の恐ろしさが戻ってくる！

水洗トイレの流す音が聞こえ、パタンとドアが開き、着物姿のマダム・桐子が出てくる。
マキにおしぼりをもらって手を拭き、カワシマの元へやってくる。

桐子　どうしたのよカワシマちゃん、急に暴れ出したりしちゃってさ。あまりいい酔い方じゃないわね、今日は。

カワシマ　……酔うということは、自ら夢の世界を求めることです。夢がどんなものかなんて、夢見る前にはわかりゃしません。いつも同じじゃないのは、あたりまえです。それをオマハンは、この私にいつも同じ夢を見てろとでもいうのですかい？

桐子　はいはい、難しいお話はもういいから……

カワシマ　よかありません！

カワシマの大声に、他の客やホステスたちもびっくりする。

桐子　カワシマちゃん……

ホステスのみつこが、カワシマの元へきて、話しかける。

みつこ　どうなさったの、カワシマ先生。

カワシマ　センセイと呼ぶな！　みっちゃん、センセイと呼ぶなとあれほどいっておいたはずです。それを君は———

マキ　（やって来て）カントク、ごめんなさい、許してあげて。みつこったら、ここが（頭を指し）ちょっとね……

みつこ　あら、マキさん、それはどういうことかしら？

マキ　別に……あなたでも気にすることあるのね。

みつこ　そりゃ、マキさんよりは神経が細やかですから……

マキ　なんですって！

みつこ　なによ！

カワシマ　ふ、ふ、ふ、おやりなさい、おやりなさい。男も女も、イヤな相手には徹底的に絡まなきゃいけません。そら、どうしました？

マキ　……いち抜けた。

みつこ　あたしも。

カワシマ　なんだ、オシマイですか。映画のようにはいかないもんですな、ふ、ふ、ふ。

みつこ　でも、センセ……あっ、ごめんなさい。

カワシマ　みっちゃん、いいですか、センセイという言葉には小頭症的な響きがある。絶対にいけません。それに———

桐子　先生と呼ばれるほどの馬鹿でなし、ね。

カワシマ　ウィ、マダーム。

そこに外からひとりの若い男が駆け込んでくる。助監督の藤村である。
みつこは客のところに戻る。

藤村　すいませ～ん、こちらに師匠いませんか？　師匠～！　お師匠さ～ん！

カワシマ　なんですか、騒々しい。

藤村　あっ、師匠。やっぱりここだったんですね、よかった。もう大変ですよ、外の雪。だんだん激しくなってきちゃって……春も近いってのに、ちょっとおかしいですよ、これは。雪でも降るんじゃないですかね。なんて、もう降ってますよって、へへへ。

カワシマ　藤村クン、ワチキは落語のお師匠さんじゃないんでげすからね！　（と怒鳴り

ながらもニヤリとしている）……オマハン、今、岡田組についてるはずでげしょう、それがどうして……

藤村　実は……あっ、その前に……

カワシマ　なんでげす？

藤村　オシッコ。

藤村、便所に入る。小便をする音。続いて流す音が聞こえる。

さっぱりした顔で出てくる藤村。

その間に客がホステスに見送られて帰る。

カワシマ　さぁ藤村クン、どういうことか話してもらいましょうか。

藤村　降りました。

カワシマ　……降りた？

藤村　はい、辞めてきました。

カワシマ　ぶあっかもん！　（突然、藤村に殴りかかる）

驚いた桐子やマキたちが止めに入る。

カワシマ　オマハン、生活はどうすんですか！　自分の生活も成り立たせることの出来ない人間に、映画なんか撮れやしません！

桐子　カワシマちゃん、藤村君の話も聞いてあげなさいよ。

カワシマ　いいや、聞く耳持たん。帰れ、今すぐ帰って、岡田に手をついてでもあやまって、仕事してらっしゃい！

藤村　師匠、そんなこといっても今さら……

桐子　そうよ、藤村君だって考えるところがあって辞めたんじゃないの。

藤村　そうです。考えました。

カワシマ　自分に都合よくなんてのは、考えたうちに入りません！

藤村　いえ、僕はやはりカワシマ組でやりたいと思いまして……

藤村の言葉を聞き、カワシマはプイと横を向いてしまう。

桐子　……藤村君、今日はお師匠さん、ちょいと飲みすぎなのよ。

藤村　いつものことですから……

カワシマ　いいやマダーム、今日はそう飲んでませんね。ちょっと調子が悪いのです。

マキ　カントク、まだ水割り二杯目よ。

みんな、不思議そうな顔でカワシマを見る。

カワシマ　……（自虐的な笑いをしながら）ボクはね、もう長くはないんでげすよ。でも、まだ死ぬわけにはいきません。残すべき爪痕（つめあと）がまだまだありますからね。だから、酒もこの程度でいい。……今まで自分は、いろいろ甘いところもあったなぁ、とは思いますが、やはり自分に過酷になった方が、死ぬときに後悔しないのではないかという気もする。だけどね、一本映画の仕事をしても一年は食えない。外国並みに四年とはいわぬまでも、せめて一年は食えるようにならなくてはいけないこの日本映画の状況を考えると、ヤワに生きていた方が得なわけで、ふ、ふ、ふ……

いつのまにか、周りの人間たちはいなくなっている。

カワシマだけに灯り。

カワシマ　……ボクは、非難されることは別に恐れてはいません。欠点があっても、正当な評価を受けないということが残念なのです。ひとりよがりでいい気持ちになっている批評なんてものは、相手にしなければいいだけのことです。……ただ、作者としての自分が、笑っているのか、怒っているのか、それとも、泣いているのか、それさえも理解されないということは、悲しく残念なことです……

室内だというのに、どこからか風とともにチラチラと雪が舞い、カワシマの肩に――――

カワシマ　雪？　……もうすぐ春だというのに、ふ、ふ、ふ……（突然気がついたように）あの少女……いや、あれはただの夢だ。珍しく酒を飲まないもんだから、悪夢を見ち

まった。それだけのことです。

――　少女は確かにいましたよ、カワシマさん。

突然、カワシマの横に現れたひとりの男。〈ラビリンス〉の客か？
しかし、男は濃いサングラスを掛けていて、顔ははっきりとは見えない。

男　そして、あなたを誘った。魂の源（みなもと）にね。

カワシマ　……あなたは？

男　失礼。折居（おりい）と申します。しがない人形作りとでもいいましょうか……

カワシマ　人形を？

折居　趣味が昂（こう）じていつのまにか仕事になってしまった。つらいところです。

カワシマ　わかります。趣味はあくまでも秘かな楽しみとしてとっておいた方がいい、ですね？

折居　ハハハハ……どうです、よろしかったら、こちらでご一緒に。

カワシマ　いや、悪いが、遠慮させていただく。……それよりあなた、あの少女は確かにいたといいましたね。そして、私を誘ったと……

折居　はい。

カワシマ　確か……魂の源（みなもと）、と。

折居　そう、魂の、源（みなもと）……

カワシマ　……（ニヤリとして）あなた、この私をからかってるんですか？

折居　いいえ、とんでもありません。あなたを尊敬こそすれ、なぜからかうなどと……

カワシマ　尊敬ですって？　こんな、くだらん映画ばかり作っている男をですか。

折居　くだらないことはない。私はあなたの映画はすべて観ているが、どれもこれもあなたの魂が込められた素晴らしい作品ばかりだ。

カワシマ　魂？　……ふ、ふ、ふ、あなた、さっきから魂、魂といっているが、魂とやらを見たことがあるんですかい？　私はないね。この世には、大層な名前がついているくせにその実体を見せないコズルイ存在がいくつかある。魂ってやつもそのひとつ。そして……風。

折居　……カワシマさん、そういったものはみな、見えないのではなくて見ないだけ、浅はかな存在である人間が、見ようとしないだけですよ。

カワシマの表情が変わってゆく。
それは、酔いに変化が起きたというのではなく、何かにとり憑かれでもしたかのようである。

カワシマ　……折居さん、わかりました。あなたには見えるんだ、いや、見えないとはいわせない。教えて下さい、私の魂とはなんなのですか？　魂の源（みなもと）とは？

折居　……そんなに知りたいですか？

カワシマ　知りたい、知りたい、知りたいね！　知りたくてウズウズしている。あの少女はこの私に向かって、もうすぐ死ぬなどといったんだ。そりゃ確かに私は、自分でもう長くはないなどといってはいる。だが、私の身体はいたって健康。胃も腸も丈夫なんです。肝も腎もピンピンしてるんだ。酒だって飲もうと思えばいくらだっていけます。ただ今日は、最近酒を飲んで余計なことをいいすぎるとちょいと反省しましてね、控えてるだけなんだ。それをあの少女は、この身体が――――

カワシマ、引き摺っている右足がもつれ、転んでしまう。
ハッとして慌てて立ち上がろうとするカワシマに、手を差し仲べる折居。
だが、カワシマはその手を振り払う。
何事もなかったかのように立ち上がるカワシマ。

カワシマ　水割り二杯でこれでは、死ぬといわれてもいたしかたございませんか……

折居　カワシマさん……散らぬ花は死んだ花です。

カワシマ　……チラヌハナハ、シンダハナ？

折居　死んだ花は散らぬ花……カワシマさん、あなたの魂は、それ、そこの鞄の中に！

カワシマ　鞄？　（カワシマが折居が指し示した方向を見ると、そこに茶色の古い革鞄がある）……冗談はやめて下さい、折居さん。これはただの古い革の鞄じゃないですか。こんなもの、どこにでもある……

――　要は何事も、中身じゃございませんか、師匠……

いつのまにか、カワシマの後方に藤村や桐子たちが後ろ向きで立ち並んでいる。

カワシマ　藤村クン、オマハン……

桐子　魂といえるものは、外から見ただけじゃわからないわ。

民子　見える世間に魂あらず、ほんに心は闇の中……

マキ　見えないと思う気持ちが、すでに見えなくしているのよ。

みつこ　それに、自分の魂なんですもの、自分で確かめてみなきゃね。

藤村　それとも、師匠……怖いんですか？

カワシマ　怖いもんか！　怖くなんかない……よし、見てやる。その鞄の中を、とくと見せてもらおうか！　（鞄を前に持ってきて開ける。中には、映画のフィルムがギッシリ入っている）……なんだ、これは！　映画のフィルムじゃないか！　何が……何が写ってるんだ？　（フィルムを透かして見る）……何も見えない……何も写ってない……真っ暗だ！

突然、藤村たちが不気味な笑い声をあげ、ゆっくりと振り向く。
その顔は、全員まるで幽霊のように青白く、眼だけが異様に光っている。
そんな彼らは、カワシマを取り巻く亡霊としての存在にほかならない。

折居　映画に込められた魂は、どこへ行ってしまったのでしょうかねぇ……

カワシマが、悪夢を振り払うかのように頭を抱えて倒れ込むと、どこからか、カワシマの名を呼ぶ少女の声が聞こえてくる。
ハッとするカワシマ。
同時に鞄の中から少女にそっくりな人形が浮き上がってきて、空中に静止する。

カワシマ　……この人形は？　（ゆっくりと人形に近づき、恐る恐る人形を手にする）

折居　カワシマさん、私の人形を返してもらいましょうか！

近づく折居に対して、カワシマは人形を抱きしめて渡そうとしない。
すると、亡霊としての藤村たちがカワシマの身体を操る動きをし、カワシマの身体は解き放たれ、人形を下に落としてしまう。

人形を拾い上げる折居。

カワシマは、身体の限りを尽くして折居に飛び掛かり、人形を取り返そうとするが、折居に触れることすら出来ずに、何度も跳ね飛ばされてしまう。

折居　君がこの荒れ果てた場所から逃れようと願わば、他の道をとらねばならぬ。わたしが君の先達となり、ここから君を永遠の場所へまず案内しよう。望み絶えた叫びが聞こえ、呵責を受けるいにしえの亡霊たちが見え、既に死んでいるのに、もう一度死にたいとさえ願う輩の屯する所へ、君を案内しよう！

カワシマ　……あなたは、誰です！

折居　かつて人であったが、今は人ではない！

折居がサングラスをはずし、顔が初めてはっきりと見える。

だが、その顔には眼がない。

折居は人形を空に投げる。

すると人形は消え、本物の少女が現れる。

カワシマは、手を伸ばしてゆっくりと少女に近づいてゆく。

そして、抱きしめる。

カワシマと少女を囲み、まるでカワシマの身体に封じ込められた魔物を解放しようとしているかのような不思議な動きをしながら立っている藤村たち。

折居　……さあ、カワシマさん、至福の時は、もうすぐです……

カワシマ、少女を強く抱きしめ、声を上げて泣く。

その顔は紛れもなく、すべての苦しみから解放されたかのような至福の表情である。

だが、どこからか聞こえてくる「ユウさん……」という声に気づき、突然、少女を突き放す。

その声の主は、カワシマの妻・ヤエにほかならない。

カワシマは「ヤエ……」と、妻の名をくり返し呼びながらフラフラと歩き出す。

いつのまにか、折居をはじめ亡霊としての藤村や桐子たち、そして少女も消え

てしまう。

カワシマは、ついには倒れ込み、ヤエの名を呟きながら頭を抱えてうずくまってしまう。

そんなカワシマを見つめている着物姿のヤエが、遠くに浮かび上がる――

3　鏡瞑譚

そこはどこだろうか？

哀しそうな表情で立っているヤエ。

微かな風が吹いている。

ヤエ　……あの人に逢いたくない。出来ることなら顔を合わさずにいたい。でも、逢わずにはいられない……あたしは、ダメな女です。映画界のことや、映画の人のことなんかまるでわからない。あの人からは、ダメな女だ、ダメな女だって、口ぐせのようにいわれる。もう、黙っているよりしようがないんです……確かに、あたしは何も知らないし、あの人はいろんなことを知っていて、これ知ってるかっていわれて、知らないと答えると、すぐ本を買ってきて、「勉強シナサイ」って、あたしに渡す。そうですかって、わりと難しい本を一生懸命読んでいると、また次の本を買ってきて、「コレハ読ンデオク必要ガアリマス」って押しつける。壁一面の本棚の、三分の一ぐらいは、あたしのために買ってくれたもの……あたしはとてもついて行けなくて、つい適当にやっていると、あの人はさらにいう。「アナタハ殆ドダメナ人デス」って。だから、あの人の世界の人に逢うのは、とてもこわい……

そこに、ひとりの男が現れる。

男　失礼ですが、カワシマさんの奥さんですね？

ヤエ　（チラッと見て、去ろうとする）

男　逃げないで下さい。怪しい者じゃありません。〈週刊新報〉の記者で、沖田といいます。

ヤエ　別に、あたしがお話するようなことありませんわ。失礼します。

沖田　いや、ちょっと待って下さいよ。実は、変な噂を耳にしたものですから、それを確かめに。

ヤエ　……何、かしら？

沖田　まあ、率直にいって、離婚を考えていると……

ヤエ　リコン？

沖田　ですから、すでにおふたりの間には夫婦生活がないに等しく……

ヤエ　あの人がそういうことをいったんですか？

沖田　いや、カワシマさんにはまだ何も伺ってませんが。

ヤエ　……（笑う）

沖田　何か？

ヤエ　あなた、新米の記者さんね。

沖田　えっ？　そうですが、なぜ？

ヤエ　（キッとなって）取材する時には、もっと相手のことを調べてからいらっしゃい！あなたのような人には何もいいたくないわ。それじゃ――

沖田　すいません、奥さん！　何か一言だけでも……手ぶらじゃ社に帰れないんです。

ヤエ　……あたしたちはね、籍は入れてないんです。ですから、ただの同居人。離婚も何も、結婚もしてないんだから、いつ別れたっておかしくないということでしょ。……新米さん、もっと大きなネタをお探しなさいな。それじゃ、さようなら。

沖田　あの、奥さん、すいません、もうひとつだけ。

ヤエ　もうお話することはありませんわ。

沖田　カワシマさんの身体の容態（ようたい）についてなんですが。

ヤエ　……あの人の身体？

沖田　ええ、それに関してはちゃんと調べてきてまして……（手帳を広げ）ええと、《進行性筋萎縮症（しんこうせいきんいしゅくしょう）》、つまり、身体の筋肉が縮んでいく病気ですね。

ヤエ　あ、あなた、何をいいたいんです！

沖田　ですから、その病気がどこまで進んでいてですねぇ……

ヤエ　知りません、そんなこと！

沖田　まぁ、離婚だという噂のひとつには、病状いかんによって夫婦生活の営みの方が

――

ヤエ　失礼な！　やめてください！　それ以上聞きたくありません。答えたくもありません！

ヤエ、耳を塞いでしゃがみ込んでしまう。

沖田、声をかけようとするが、仕方ないという感じで立ち去る。

ヤエ　……かわいそう。あの人、かわいそう……誰か、助けて……あの人を助けて……

ヤエは、一瞬クラッと眩暈でもしたかのようにその場に倒れ込み、カワシマの苦しみを自らも引き受けるかのように、身体を縮めて苦しみ出す。

風が激しくなり、不気味な闇と悪魔的な霧の訪れと共に、辺りの様子が一変する。

すると、どこからともなく、〈箱舟迷宮商会〉の人々、すなわち、鏡売りやら猫の眼売り、花火売り、不思議売りなどの声が交錯して聞こえ、あちらこちらに現れる。

鏡売り　鏡、鏡はいりませんか。極楽巡りは石鏡。枕鏡で夢一夜。鏡絵開いて春の宴。明日の自分が写る来眺鏡。ありとあらゆる病いを吸いとる療癒鏡はいりませんか。鏡、鏡はいりませんか。

猫の眼売り　猫の眼いらんかね。真っ暗闇でもキラリと光る、猫の眼いらんかね。三毛猫、シャム猫、ペルシャ猫。非常ランプの代わりにひとつ、猫の眼いらんかね。

花火売り　花火、花火はいかがかな。春の花火は眠り草。夏咲き花火パッと散り、秋ゆく花火で恋化粧。冬の花火は忘れ花火だよ。マッチ一擦り花火を点けて、燃える陽炎夢小花。花火、花火はいかがかな。

不思議売り　不思議売りますぞ。空から魚を降らせましょう。それとも地から金銀財宝。夜見る夢もお好みで、思い通りの場所へもひとっ飛びだよ。さてさて、不思議売りますぞ。

それらの声を聞き、ヤエが苦しみから解放されて立ち上がると、そこに不思議な服を着た気味の悪い男が現れる。

男　わんばんこ、いや、こんばんわ。

ヤエ　……誰？

男　名もなき迷宮売りでございます。私はあなたが、どこのどなたの、あっそうだったのか、ということすらまるで存じあげていない、知らぬが仏ケ浦の貧しいただの男でございます。いえ、ただのと申しましても、名字が只野というわけでもなく、ましてや、ただで何かをもらおうとか売ろうとかいっているのでもありません。お聞きいただけましたでしょうか、妖麗なる売り声を。鏡、猫の眼、花火に不思議。他にもいろいろありますが、あれらはみな私と同じ〈箱舟迷宮商会〉の社員たちであります。当商会では歩合制をとっておりますので、みなああしてガムパッテおるわけです。何しろ、ひとつ売れれば人ひとり分の人生が保証されるわけでして……いや、まぁ、それはともかく、（キリッとして）いかがですかな、迷宮をおひとつ。お安くしときますよ。

ヤエ　……あの、さっきの鏡売りの方がいってらしたこと、ほんとでしょうか？　ありとあらゆる病いを吸いとる――

迷宮売り　療癒鏡のことですな。

ヤエ　はい。

迷宮売り　もちろん、本当です。当商会では、商品に対して絶対の自信と信用を誇っております。創業以来、迷宮ひと筋八百年の実績が、ほれ、この通り！　（と、手紙やハガキの束を取り出す）

ヤエ　……なんですの、これ？

迷宮売り　お買い上げいただいた方々からの、アンケート並びに感謝の手紙です。

ヤエ　（読む）「長年悩み続けていた不眠症も、夢見石を使い出してからグッスリ眠れるようになり……」「イリオモテヤマネコの眼球、本当にありがとう。おかげで仕事がしやすくなりました。アルセーヌ・ルパン」「感謝感激。不思議大好き。イトイ……」「あんなに暗い性格だったあの娘が、天恵花火のおかげで、今では村の人工太陽と呼ばれるほどに明るくなり……」「〈箱舟迷宮商会〉は、悩み解消のホームラン王です」

迷宮売り　いかがですかな。無論、こんなものはほんの一部に過ぎませんが。

ヤエ　譲って下さい、療癒鏡を！　おいくらですか？

迷宮売り　ちょっと待って下さい！　今、在庫があるかどうか確かめますから……何しろ

療癒鏡は冬の花火と並ぶ人気商品でしてね、仕入れてもすぐ出てしまう。（といいながら、気味の悪い動作をする）……あっ、ラッキー！　とでも申しましょうか、ひとつだけ残っていました。といいましても、粗悪品というわけじゃありませんから御心配なく。それに、残りものには福がある、といいますからね……（急に雰囲気が変わり）療癒鏡を、ここに！

赤地の錦の覆い布が掛けられた、大きな鏡のようなものがゆっくりと運ばれてくる。

ヤエが近づき、布をめくろうとすると、迷宮売りが「いけません！」と怒鳴る。

迷宮売り　よろしいですかな、この療癒鏡には、正面の姿を向けてはいけません。なぜなら《前は極楽、後ろは地獄》。つまり、ありとあらゆる病いは、人の後ろにとり憑いているからです。悪霊である背後霊の存在がそれです。それをこの鏡に吸いとらせるわけですから、この療癒鏡には、背を向けて立たなければいけない。さあ、いいですか。（と、ヤエを鏡の前に後ろ向きで立たせる）

ヤエ　待って下さい。あたし今、お金を持ってなくて、家に帰らないと……

迷宮売り　結構です。一回はサービスです。つまり、無料です。

ヤエ　でも、その背後霊を退治してもらいたいのは、あたしじゃなくて……

迷宮売り　誰でも一匹や二匹は飼っているはずです。そうではありませんか？　一度効果を試してみて下さい。そして正規にお買い上げ下さい。一週間以内でしたら返品は御自由です。さあ、鏡を出します！

迷宮売り、勢いよく赤い布を取る。

すると、大きな鏡がヤエの後ろに現れる。

迷宮売り　いいですか、何があろうと起ころうと、絶対に振り向いてはいけません。もし、振り向くと、とり返しのつかないことが起きてしまう。つまり、健全なる魂までもが、その鏡に吸い取られてしまうのです。

ヤエ　魂ですって？

迷宮売り　あなたの中の真実です。さあ、五分間の辛抱です。

ヤエは次第に、苦痛と快楽をとり混ぜたような身体の動きを始める。
それは、哀しくもあり、ひどくエロチックでもある。

ヤエ　……あたし……何だか……身体が勝手に……

迷宮売り　今、病いが鏡の引力によって引き寄せられているのです。

ヤエの動きが激しくなると、どこからか苦痛に喘ぐ声が聞こえてくる。
それは紛れもなく、カワシマの声である。
すると、鏡の裏に、まるで幽霊のように、幻影としてのカワシマの姿が浮かび上がる。

カワシマ　……ヤエ、助けてくれ……苦しい……ヤエ……

ヤエ　ユウさん？　あなた……どこ、どこにいるの？

カワシマ　わからない……真っ暗だ。何も見えない……うぅ、苦しい……

ヤエ　あなた……（振り向こうとする）

迷宮売り　振り向いてはいけない！

カワシマ　ヤエ……助けてくれ……これはなんだ……は、花だ、真っ赤な花が……降ってくる、どんどん、どんどん……く、苦しい……ヤエ……ヤエ、助けて……助けてくれ！

ヤエ　あなた！　（振り向いてしまう）

と、一瞬にしてカワシマの姿は消えてしまう。

迷宮売り　……振り向いてしまいましたね。

鏡に向かって立ち尽くしているヤエ。
顔は見えない。
風が空しく通り過ぎていく中、ヤエの押し殺した笑い声が、次第に大きく広がってゆく。
それはまさしく何かにとり憑かれたような、不気味な笑い声である。

迷宮売り　……前は極楽、後ろは地獄。合わせ鏡の迷宮譚。今宵丑の日、丑の刻。巡りし時の運命にて、堕ちゆく先は奈落の果てか……さてさて何が見えますやら……

迷宮売りは謡うようにそう語ると、煙のように消えてしまう。

鏡も同時に消える。

辺りの様子は元に戻り、ヤエも力尽きたようにその場に坐り込んでしまう。

「ユウさん……」と小さな声で呟きながら泣いているかのような、ヤエの後ろ姿。

ゆっくりと、暗転。

4　ミューズの蹠

明るくなると、再び、バー〈ラビリンス〉。

藤村がいくらか酔った様子でカワシマに絡んでいる。

藤村　……しかしですね、師匠、バカバカしいものをバカバカしいといって、どこがいけないというんですか？

カワシマ　（笑いながら）オマハン、なかなか結構な酔い方をしてきたじゃござんせんか。

藤村　誤魔化さないでください！　師匠、僕は今まで計九本の作品につかせていただきました。でも、ボクが認めるのは三本だけです。たった三本。三割ですよ。

カワシマ　打率三割なら、まぁまぁってとこでしょう。当然、レギュラーでげすな。

藤村　いや、だめです。師匠には、もっともっといい映画を撮ってもらわなければ困ります。バカバカしいものは、もうやる必要はありません。……ボクは、岡田組を蹴ってきたんですよ。カワシマ組でやりたいからです！　師匠、あんたと一緒にいい映画を作りたいんだ！　岡田監督は確かに商売はうまいかもしれない。だが、中身がない。何をやりたいのかわからんのです。派手なことをやれば客に受けると思ってる。スターさんを呼んでくりゃいいと思ってる。心がないんですよ、心が！

カワシマ　ワチキもスターさんの映画、何本か撮りましたがね。あれはみな、セイカツの

ためでした。

藤村　師匠！　そのヒヨワさがいかんのです！　（と叫んだ後、急におとなしくなる）

カワシマ　……どうしました、藤村クン？

藤村　いえ、何だかいつもと違うんで……いつもはカラミ役の師匠が、今日はおとなしくて、グチをいうのは僕ばかり……

カワシマ　オマハン、いいですか、カラムということとグチとは根本的に違います。グチをいうのは、その人間の心が貧しいから。カラムのは……ちょっと寂しいだけです。

藤村　師匠……

カワシマ　オマハン、女優の山尾雅、知ってますね。

藤村　師匠の作品にも何本か出た……

カワシマ　あの山尾クンも、ついこの間、但馬健吉大監督に絡んだそうでげすよ、ふ、ふ、ふ……

どこからか「ヨーイ、スタート！」の声と共にカチンコの鳴る音がし、ウエディングドレス姿の女が駆け込んでくる。

それは女優の山尾雅であり、カワシマの想像の中の映画撮影風景である。

山尾は、立ち止まると、振り向いてクサイ芝居を始める。

カワシマはその場所に近づき、成り行きを見守ったり、写真を撮ったりする。

山尾　「……凍えてなんかいやしません。今、あたしに必要なのは、やさしさ。やさしくされたい、愛されたい。ムネユキさんの心の羽根に抱かれて、ふたりで空を飛びましょう。ふたりで空駆ける白鳥になって……白鳥よ、湖で戯れるだけじゃなく、時には、やさしく――――」

突然、山尾は演技を辞めてしまう。

しばらく変な間があり、但馬監督の「カーット！　カットだ、カットだ！」という声がして、但馬監督が出てくる。

但馬　……山尾クン、どうしたんだね、急に芝居を辞めてしまって……ボクは怒るよ。

山尾　イヤになったんです。

但馬　な、何？

山尾　これ以上やってられないわ、バカバカしくて……

但馬　ど、どういうことだね、君！　冗談じゃない……ま、まぁ、いい、すぐ続けるんだ。さあ、行くぞ！

山尾　あたしも、冗談じゃないわ。

但馬　……君は、自分で何をいってるのか、わかっとるのかね？　この私が誰だか知らないわけじゃなかろう。

山尾　よく存じ上げていますわ。恋愛映画を撮らせたら、右に出る者はいないとまでいわれている巨匠、但馬健吉大監督さま。でも巨匠、この台本（ホン）、ほんとにあんたが書いたの？

但馬　あ、あんた、だと！　……当たり前だ。私の監督生活七十本目にあたる記念超大作、『愛のこもれ陽（び）』。私以外に誰に台本（ホン）が書けよう、

山尾　監督、あたしは今の今までシナリオに文句をつけたことは一度もありませんでしたわ。俳優がシナリオを批判するなんてのは、自分の無知をさらけ出しているようなもんですからね。でも監督、これはひどすぎるわ。いくら恋愛映画の巨匠でも、ホントの恋愛の方は知らないんじゃなくって。

但馬　な、何！

山尾　なぁに、この台詞。「……心の羽根に抱かれて、ふたりで空を飛びましょう」。今どき、小学生だってこんなこといいやしないわよ。

但馬　バカモン、小学生と一緒にするな！

山尾　そういえば巨匠、あんた、ホモだって噂があるらしいけど――――

但馬　し、失礼な！

山尾　いいえ、それは別にいいの。同性愛だって、素晴らしい芸術家はたくさんいるわ。ただここは、ホントに好きな人と一緒になりたいから結婚式場から逃げ出してきた場面でしょ。もっと女心のリアルで切実な台詞で――――

但馬　山尾！　それ以上ワシを侮辱すると、許さんぞ！

山尾　（唖然として）……フン、巨匠ヅラするんじゃないわよ！　まったく、いい年して「白鳥」もないもんだわ。名曲喫茶じゃあるまいし。

但馬　うぅ、てめぇ、二度と映画界で仕事出来ないようにしてやっからな！

山尾　あら、ついに本性ムキ出しにしたわね、巨匠。まるでどこかのチンピラヤクザじ

やない。

但馬　な、なんだと！　くそっ、追放だ！　粛清だ！　パージだ！

山尾　結構毛だらけ猫灰だらけよ！　会社の御都合主義ばかりで中身が何もない映画界なんて、こっちからオサラバしてやるわよ。未練なんてこれっぽっちもないわ。

但馬　よくいったな、山尾。後で吠えヅラかくなよ！

山尾　あんたのキョショーヅラの方が、よっぽど滑稽だわ。もっとも、キョショーのキョは、虚構の虚だってことがはっきりしたけど！

但馬、その様子を見守っていた山尾の付き人・佐久間を突き飛ばして出て行く。カワシマは、山尾と但馬のやりとりを開きながら、笑ったり、頷いたり、愛用のミノックスカメラで撮影したりしていたが、但馬がいなくなると山尾と佐久間の近くにやってきて、いろいろ口を挟む。もちろん、山尾や佐久間には聞こえない。

佐久間　……山尾さん、いいんですか、あんなこといっちゃって。

カワシマ　ちょっといい過ぎでげすな……

山尾　うるさいわね、ほっといてよ！

カワシマ　これはこれは。

山尾　……ごめんなさい、佐久間ちゃん。

佐久間　いえ、いいんです。ボクも実は、いろいろ頭にきてたんです。あのシトは、オエライさんにはペコペコするくせに、ボクらみたいな下の人間には威張り散らす……だから、スッキリしちゃいました、へへへへ……

カワシマ　要するに、ああいう男は自分に自信がないわけです。

山尾　……でも、これであなたともお別れね。こんなわがままな女優の面倒、よく見てくれたわね。ありがとう、佐久間ちゃん。

佐久間　何をいってるんですか、山尾さん。ボクはずっとあなたと一緒に……

カワシマ　麗しき徒弟愛でげすな。

山尾　松岡さんのところがいいかしら、あそこなら、きっと……ねぇ、佐久間ちゃん、松岡さんの事務所紹介してあげるから、そこで付き人の仕事続けなさいな。

佐久間　山尾さん！　ボクはあなたのそばを離れるつもりはありません！

山尾　でも、あたしはもう女優として生きていく道はないの。聞いたでしょ、あなたも。だから、付き人ももういらないの。雇えないのよ。たとえ名目だけでも、大監督と呼ばれてる人に逆らったんだから……

佐久間　そうです。あんな監督は名目だけです。本当の才能なんてないと思います！

カワシマ　なかなかいいますな、オマハンも。

佐久間　本当の名監督なら、山尾さんをもっと活かすはずです。あんなつまらない台詞いわせるなんて……くだらないです。だいたいあの人の映画は――――

山尾　わかったわ、佐久間ちゃん。もうそれ以上いわなくていいわ。山尾雅、ひとかけらの未練もないんだから。

佐久間　……そうでしょうか？　山尾さんは素晴らしい女優です。もったいないです。あの『戯れる獣たち』とか、『女の信号』のような演技を、また観たいです。

山尾　あれはね、監督がよかったのよ。

佐久間　カワシマ監督……

山尾　……そうね、二本ともカワシマ旦那の作品だったわ。フフフ……イイカゲンだとか、ただの風俗だとか、いろいろ非難されたけど……もしかすると、カワシマ旦那こそ、日本一の名監督なのかもしれないわねぇ。

カワシマ　（クシャミをして）そりゃ山尾クン、カイカブリ過ぎです。ワチキが日本一じゃ、日本の映画界があまりに寂し過ぎます。

佐久間　またやってください！

山尾　だめよ。あたしはこんなになっちゃったし、カワシマ旦那だって、噂によると、酒浸りでだめだっていうし……

カワシマ　こりゃ、泥馬クラブならぬ、噂の真相ってやつが必要でげすな。

佐久間　だから、ふたりで組んで、もう一度。

山尾　花を咲かせようっていうの？

佐久間　そうです

山尾　……夢ね、いい夢だわ……カワシマ旦那……あたしを女優に、いえ、女にしてくれた……あれは、『戯れる獣たち』の前だったわ。あの人は制作発表の席上でね、オモムロに「この映画で山尾クンを女にしてみせます」って明言したの。いかにそれまでのあたしが女でなかったかって……

カワシマ　（笑って）そんなこともありましたかな。恥ずかしい限りです。

山尾　……それでね。さぁ撮影っていうときに、みんなどういう演出するんだろうって興味津々で見守っているわけ。そうしたら突然、あたしの手をもの凄い力で引っ張って、あっちこっちドスンドスンと動かし回す。それが終わると、「さっ、今度はあなたがひとりでおやんなさい」って自分は腰を降ろしちゃう……（笑って）それだけなの。後でみんなに散々いわれてね。どこが女なんだって……でも、あたしにとってはショック、というより驚きの連続だったわ。やっぱりあれで、お嬢さんから女になったのかもしれない……

カワシマ　その節は、すいませんでした。

佐久間　……カワシマ監督に逢ってください！

山尾　でも、どこにいるのか……

カワシマ　ここにいますぞ！

佐久間　ボク知っています、行きつけの店。銀座の〈ラビリンス〉っていうバーです。

カワシマ　そうです。〈ラビリンス〉。いらっしゃい、いらっしゃい。

山尾　……そうね、もしかするとカワシマ旦那とじゃないとだめなのかもしれないわね。

佐久間　タテマエには、サヨナラです。

山尾　その通りね。今、やっとわかったのかもしれない……

山尾、佐久間を抱き寄せる。

そこにカワシマがやって来て、二人を〈ラビリンス〉に誘う。

二人は楽しそうに〈ラビリンス〉の客となる（山尾は着替えに入る）。

遠くにヤエ。

ひとりポツンと立ったまま、『春よ来い』の歌を口ずさんでいる……

5　夢の解剖学

バー〈ラビリンス〉。

「ヨーイ、ドカン！」というカワシマの声がして、みつことマキ、それに藤村が、『幕末太陽傳』のおそめ、こはる、佐平次にそれぞれ扮して、行燈部屋の一

場面を再現する。
カワシマは、ニコニコしながら桐子や佐久間たちと一緒に楽しんで見ていて、時折、ミノックスで写真を撮る。
山尾は着替えを終えるとトイレから出て来て一緒に見る。
再現劇の途中で、〈ラビリンス〉に客がそっと入ってくる（谷地が気づいて案内する）。
それは、カワシマ映画の常連俳優の小田庄助である。
小田は、まるでカワシマの映画に出て来るように、金髪で怪しい格好をしている。

――佐平次（藤村）、荷ごしらえをしている。と、そこへ、おそめ（みつこ）とこはる（マキ）がやってくる。

おそめ・こはる　「いのさん！」
佐平次　「おお、こりゃお揃いで」
おそめ　「ちょっとお前さん、一体どうしたのさ」
佐平次　「へぇ、早発ちでここを出掛けなくちゃならないもんで……いろいろお世話になりやした」
こはる　「えぇ。どうして行っちまうのさ。わっちは、年が明けたらお前と一緒になるつもりで……」
おそめ　「わっちだって。枕をかわした男は多いけど、死ぬまで連れ添うのは、お前だけ……」
こはる　「そりゃわっちにも云いたいせりふ。こんな御時勢にゃ、顔は少々ハンチクでも、お前さんみたいな図々しい人でなきゃ頼りにならないよ」
おそめ　「わっちだって……」
こはる　「わっちの方が……」
おそめ　「わっちの方が……ねぇ、いのさん、わっちら二人のうち――」
おそめ・こはる　「一体どっちが好きなのさ？」
佐平次　「（荷造りしながら笑って）好きも嫌いも、俺ァ女は断ってるんだ」
おそめ・こはる　「（同時に）ええっ？」

佐平次　「実ァな、横浜村の新開地で居残り稼業をやってた時にちょいと胸痛めて、居留地のヘボン先生に診(み)て貰ったら、この病いには女は禁物」

おそめ　「え、じゃあやっぱりお前さん、労咳(ろうがい)……」

こはる　「そう云われりゃ、ずい分顔色が……」

佐平次　「いやァ、ここんとこ大分(だいぶ)調子がいいし、それに、明日ァ横浜村で診て貰って、いいと云われりゃその足で、ゴホッゴホッ……俺ァなァ、ヘボン先生についてアメリカ国へ渡り、居残り稼業を続けるつもりだ」

こはる　「そんなら、わっちも一緒にアメリカ国で――」

おそめ　「そんな遠いところへ行かないで、この品川で、わっちとふたりで幸せに……」

佐平次　「おっとっと……その幸せが、おいらの苦手」

おそめ・こはる　「え、どうしてさ！」

佐平次　「それにな、アメリカ国とこの品川、まぁひとつでなきゃァ、この身がもたねぇや」

おそめ　「そんな冗談を……ねぇ、いのさん、わっちゃァ、ちゃんとこうして起請(きしょう)まで持って来たんだよ」

こはる　「わっちだって、ほら、これは自分で書いた本心の起請文(きしょうもん)だよ」

佐平次　「へへへへ、起請文(きしょうもん)なら、（紙の束を見せ）売るほどござんす」

おそめ・こはる　「えぇッ……」

佐平次　「……（紙の束を荷物に入れて持ち）愚図愚図してたら夜が明ける。へ、まっぴらごめんなすって」

おそめ・こはる　「ちょいと、いのさん！」

――佐平次が出て行こうとすると、若衆の喜助（ホステスの民子）がやってくる。

喜助　「いのどん、いのどん、いのどん！　助けておくれ、こはるさんのお客がどうにも寝ないんだよ、なんとかうまくまるめておくれよ」

佐平次　「俺ァ、ちょいと忙しいんだい。こはるさん、代わってやんなよ」

こはる　「杢兵衛大尽(もくべえだいじん)かい。いやだよ。おそめさん、あの人以前おまえさんの客だろ、おまえ行ったら」

おそめ　「わっちァ、この夏の麻疹(はしか)で死んだことになっておまえに代って貰ったんじゃないか。あいつの顔見ただけで、カーッ、胸が悪くなるよ！」

こはる　「わっちァ見なッくても、ウウッ、テンカンが起きるんだよ！」

喜助　「なァ、いのどん、俺たちじゃどうにも手に負えねぇんだ、この通りだ、な、頓む。頼む、頼む、いのどん！」

佐平次　「えーい、よーし！　じゃァ、任しとけ！」

こはる　「いのさん、待ってるからね」

おそめ　「わっちだって待ってるからね」

佐平次　「（喜助に）部屋ァ何番だッ？」

喜助　「名代(みょうだい)の六番で」

——佐平次、出て行く。

するとそこに、カワシマが声をかける。

カワシマ　よし、杢兵衛大尽(もくべえだいじん)は、このワチキがやりましょう！

みんな、拍手をし、カワシマは羽織を羽織る。

そこに、小田が声をかける。

小田　では、佐平次は、このあっしが。

気づく、みんな。

藤村　小田さん！

カワシマ　ふ、ふ、ふ……決まってます。さ、いらっしゃい！

小田が着物を着て、カワシマと共に中に入って座り込む。

拍手をする桐子たち。

みんなで一緒に見守る。

佐平次　「……へへへへ、実ァ、こはるさんのことにつきまして、ちょいと」

李兵衛　「おぅ、こはるは、はァ患(わずら)ってるってぇが、いってぇどこが悪くて、どんなあんべっこだか、ボヤボヤしてねぇで早く話してくんろ、ジレッテェ！」

佐平次　「へェ……それが、どうも、あっちもこっちも悪いようなんでござんしてね」

李兵衛　「あっちもこっちもでは、わかんねぇでねぇか！」

佐平次　「へ、へェ……たしか、腎(じん)とか肝(かん)とか」

李兵衛　「ジンとカンでは、はァ、違うでねぇだか、此(こ)のオットボケが！」

佐平次　「へェ、たしかその――」

李兵衛　「医者はどこだか！」

佐平次　「へェその――」

李兵衛　「具合っこはどうだか！　どこがどう、かっくりけえって、どこがどうケッくりけえってるだか！　スッパリスッパリ、はァ、俺がのように手ッ取り早く、話せってるだに、判らねぇのか、このフラフラ野郎！」

佐平次　「へェ……（と、面倒臭くなってアグラをかき）えぇーい、じゃァすっぱりすっぱり云っちまいやすがね、実ァこはるの奴ァ、ケッくりけえって、もう、おっ死んじまったんで」

李兵衛　「アレ！　死んだ？」

佐平次　「へェ、どうも御愁傷様(ごしゅうしょうさま)で」

李兵衛　「アンレ、マハァ……よう、そりゃまァ……へぇ……えぇえぇ（と泣く）……」

カワシマ、泣きながら、「アンレ、マハァ、よう、そりゃまァ」と繰り返しながら、みんなを巻き込んで、一緒に合唱させる。

みんな、泣き笑いをしながら一緒に盛り上がり、再現劇は終わる。

藤村　……師匠、小田さん、お疲れ様でした。

カワシマ　藤村クン。

藤村　はい。

カワシマ　助監督をクビになったら、役者をおやりなさい。

藤村　ホントですか！

カワシマ　冗談です。フラさんには及びません。

小田　カントク、お呼びにあずかりまして、メルシー、ボークーちゃん。

桐子　（笑いながら）カワシマちゃんと小田さんの競演なんて、なかなか見られないわね。

カワシマ　あの世でなら、あり得ます。

桐子　やだ、あの世でなんか見たくないわ。

佐久間　あ、あの、何かの本で読みましたが、監督は、『幕末太陽傳』をもう一度やり直してみたいとか……

カワシマ　いや、幕末はもう結構。今度は、寛政（かんせい）でげす。

藤村　『寛政太陽傳』、ですか？

カワシマ　そうです。写楽（しゃらく）を出します。

小田　おうっ、しゃらくせぇ！　ってやつですな。

山尾　おもしろそう。今度は私も出してね。

カワシマ　もちろんです。

藤村　見返り美人のモデルの役がいいんじゃないですか。

カワシマ　藤村クン、あれは――

佐久間　菱川師宣（ひしかわもろのぶ）ですよね。

カワシマ　そうです。ん、キミは確か、支那料理屋志望の……

佐久間　は？

山尾　シナリオライターよ。

佐久間　あ、は、はい！

カワシマ　何か書きましたか？

佐久間　はい。主演が山尾さんで、女探偵の話なんです。依頼された汚職の調査をしているうちに、その悪い社長のことを好きになって……

カワシマ　ふむ、なかなかおもしろそうでげすな……

佐久間　監督は、ぜひカワシマさんに！

カワシマ　結構、乗りましょう、その話！　ただし、いいですかな佐久間クン。今、人間の思考を仮に百とします。思考を言葉にすると、百の十分の一の、十です。その言葉を文字にすると、そのまた十分の一です。文字で飯（めし）を食っていくには、せめて、思考の百分の二、いや、一・五ぐらいの表現が出来ないことには失格です。わかりますか？

佐久間　は、はい！

カワシマ　よろしい……では、みなさん、早く着替えて、いよいよ本格的に飲み直しましょう！

藤村、みつこ、マキ、民子らは奥に着替えに引っ込み、山尾たちは席に座って飲み直す。

カワシマは、そんな彼らの姿を、写真を撮って回る。

すると、みんなと離れた場所に折居が浮かび上がる。

カワシマが折居に近づいて行くと、カワシマと折居だけになる。

カワシマ　……折居さん、どこにいたんです？

折居　ずっとここで拝見していましたよ……カワシマさん、あなたは遠回りがお好きなようですね。

カワシマ　遠回り？

折居　あなたが探し求めているものは、もっと近くにありますよ。

カワシマ　……あの、少女ですか？　あれはもう、いいんです……私にはやはり――

折居　ヤエさん、ですか……

カワシマ　（一瞬ハッとするが）ふ、ふ、ふ……やめましょう、その話は……

折居　カワシマさん、あなたの探し求めている魂、映画に込められていた魂を消してしまったのは、もしかすると、ヤエさんかもしれませんよ……

カワシマ　なんですって？

折居　ごらんなさい、ヤエさんが呼んでいます。（ある方向を指し示す）

カワシマが折居の指した方向を見ると、そこにヤエがいる。

だが、どこかおかしい。

それは、折居が創り出した幻影としてのヤエである。

だが、カワシマにはわからない。

幻影のヤエは何か分厚い本を抱えていて、「ユウさん……」とカワシマの名を呼んでいる。

カワシマ　なぜここにヤエが……

折居　きっとあなたに逢いたくて来たのでしょう……それに、カワシマさん、ヤエさんが持っているものこそ、あなたの魂ではありませんか？

カワシマ　……ヤエさん、どうしたんです、どうしてこんなところに？　（と、近づこうとする）

ヤエ　来てはだめ！　ここはあなたの来るところじゃありません。

カワシマ　何を言ってるんです。ここに、この〈ラビリンス〉に来たのは、あなたの方じゃ……

カワシマは、辺りの様子が変わっていることに気づき、押し黙ってしまう。

カワシマ　……ここは……どこなんだ、ここは！

ヤエ　ユウさん、心配することはありませんわ。あなたは、そこにいればいいんです。

カワシマ　……ヤエさん、あなた、何を持っているんです？　その本のような……待って下さい、私にも見覚えがあります、その本……

ヤエ　（後ろに隠そうとする）なんでもありません。あなたに読めと薦められた料理の御本（ごほん）です。

カワシマ　いや違う、それは――

と、一陣の風が吹き、ヤエの抱いていた本が手から離れ、カワシマの近くに落ちる。

カワシマ　（本を拾い上げ、書名を読む）……カテイ、イガク、ゼンショ……

カワシマ、小さくアッと叫んだかと思うと、本を投げ捨てる。

同時に、どこからか聞こえてくる声。

カワシマは聞くまいと耳を塞いでしゃがみ込む。

ヤエの姿は消えてしまう。

――

進行性筋萎縮症（しんこうせいきんいしゅくしょう）。四肢（ししの）の筋肉の萎縮（いしゅく）が、ほぼ左右対称性に徐々に進行する疾患（しっかん）で、

萎縮性側索硬化症と、脊髄性進行性筋萎縮症に大別される。いずれも脊髄中にある運動系神経線維および細胞の進行性変性によるが、原因はまだ不明である。多くは中年以後、四〇～五〇歳代に発病し、男性にやや多い傾向がみられる。一般に指の筋肉の脱力、萎縮から始まることが多く、ついで筋肉の萎縮は体部にひろがり、両足の痙性麻痺による歩行障害が起こる。末期には、延髄の運動神経核も冒され、舌の萎縮、言語障害、嚥下困難などの延髄麻痺を起こし、多くは発病後数年以内に死亡する。特別の治療法はない。

カワシマ　……もう結構です、折居さん……（立ち上がり）私は魂なんか欲しくない！　もう見たくもない！　あなたは……メフィストフェレスだ。そうだ、そうに違いない！　私の魂なんかくれてやる。好きに持っていくがいいさ！

折居　……大きな誤解をしているようですな、カワシマさん。私は悪魔ではない。悪魔は、カワシマさん、あなたの中にこそ存在していたのです。

一瞬、風が強く吹き、遠くでカラスの鳴き声がする。
イタコの口寄せのような声と共に鈴の音が響き、そこは紛れもなく恐山の風景となる。

折居　ごらんなさい、カワシマさん。ここは、あなたの魂の風景です……

カワシマ　……恐山？　……違う！　違います。私の魂に恐山など存在しない。私は、この、こんな私を生んだ恐山を憎んでいるんだ！

折居　カワシマさん、自分自身を騙し続けることは出来たとしても、その憎しみが、あなたの中の悪魔の存在によって生まれたということを、否定することは出来ませんよ……

絣の着物を着た坊主頭の少年が現れ、石を積み始める。

カワシマ　……あ、あの少年は！

折居　そう、あなた自身。あなたの少年時代の姿です。

少年は、一番上の石がなかなか乗らず、何度もくり返している。

折居　覚えていますか？　あなたは、あなた自身の中に悪魔を発見したある日、学校を抜け出し、ひとりで恐山に登った。そして、悪魔が消え去ることを願いながら、ひとつふたつと石を積んだ。しかし――――

カワシマ　わかった、やめてくれ！

折居　どうしても最後の石が乗らなかったんだ！

少年は何度もくり返し石を積む。

だが、一番上の石だけは、どうしても崩れ落ちてしまう。

カワシマ　（少年に向かって）おい、やめろ、やめるんだ！　君……いや、お願いだ……やめてくれ、もういいから、やめろ……やめてくれ！

少年の姿は、一瞬のうちに消えてしまう。

どこからか、風の音に混じって、津軽三味線《じょんがら節》が聞こえてくる。

そして、カワシマの中学時代の日記が読み上げられる声が広がってゆく。

声（日記）　……二月二十六日木曜。今日は全校運動があった。その時僕は八幡様を一周した。考査はよかった。英作は二つとも満点、作文は甲、漢文は九八点七分であった。感想。春。日ましに暖かくなってきた。とはいうものの北国のこととて、時々北風が吹いてゐる。土がこひしい。故郷がこひしい。去年の今頃は入学試験の準備で一生懸命勉強してゐたのだ。遠くに連なる山脈も、とうとうと流るる野辺地川も、まだ深い冬の夢をむさぼってゐるのである。春、春はまだ浅い。遠く幾里かの道をへだてた恐山は、さんぜんと銀の光をはなつ。……十一月十三日金曜。朝遅くおぎだので、つらもなもいくらかげにあらだ。ままくてがこさいた。じゃんことけんかした。おもしれかだ。はだここへた。ばげままくた……

その間、学生服姿の少年たちが後ろをゆっくりと通り過ぎてゆく。

それが時間の逆行を示すかのように、カワシマも少年の姿になってゆく。（膝を

ついて立つ）

いつのまにか、カワシマの近くに、カワシマの母・タケと兄の敏次が立っている。

ふたりの着ているものは、なぜかボロボロである。

タケ　……ユウゾウ……ユウゾウ……

カワシマ　母さん！　トシジ兄さんも……どうしたんだい、そんなカッコして……

タケ　ここは地獄じゃ。オメのくるところじゃねぇ。

カワシマ　地獄？

タケ　ワシラは今、地獄詣りの途中じゃ。ほれ見てみぃ、三途の川の渡り賃じゃ。（と、六文銭を投げる）

カワシマ　（拾い上げて）……何いってるんだ、母さんが地獄へなんか落ちるわけないじゃないか！

タケ　いいや、地獄でいいんじゃ。ワシラにはな、地獄が一番合っとるんじゃ……それにな、あの恐山の生き地獄に比べりゃ、ずっと楽なもんじゃ、ヒ、ヒ、ヒ……（狂ったように笑う）

敏次　……ユウゾウ、母さんはああいっとるが、これは因果応報じゃ。ワシラの血が、ワシラのこの濁った血が、ワシラを地獄に呼び寄せたんじゃ……

別の場所に、病気の寝床から抜け出したような、浴衣姿でおさげ髪の、カワシマの姉セツが現れ、「ユウちゃん……」とカワシマの名を呼ぶ。

カワシマ　姉ちゃん！　（と、近づこうとする）

敏次　セツに近づいちゃいかん！　……セツが肺をやられてるのは、オメも知っとるじゃろ。

カワシマ　……姉ちゃん、大丈夫か？

セツ　ユウちゃん、ありがとう……あんただけだよ……みんな、怖がって見舞いにも来てくれんのに、あんただけは違った……学校から帰って来ると、いつも来てくれたね……ずっと添寝してくれて……姉ちゃん、嬉しかったよ。とってもとっても嬉しかった……（突然、口を押さえてしゃがみ込む）

カワシマ　姉ちゃん……

セツ　……あ、ありがとうね、ユウちゃん……（口から血を吐いて倒れる）

カワシマ　姉ちゃん！

敏次　見ろユウゾウ、セツの吐いた血を！　……真っ黒じゃ……黒く濁った血、因果応報の真っ黒な血じゃ……

突然、タケがカワシマの背後に飛びついて首を絞める。
タケの狂笑。

カワシマ　何をするんだ母さん！　やめろ、やめてくれ！　……（苦しみながら）これ以上何を背負わすっていうんだ！　もういやだ、やめてくれ、お願いだから……くそっ！（と、タケを振り落とす）……大丈夫かい、母さん？　（近づこうとすると、タケは敏次の後ろに隠れてしまう）

敏次　……ユウゾウ、オメだってもう逃げられやしないんじゃ、オメの身体にとり憑いた悪魔からな……オメのその縮んでいく身体ン中にもセツと同じ、いいやワシラみなと同じ、真っ黒な血が流れとるんじゃ、因果応報輪廻転生（いんがおうほうりんねてんしょう）の濁りきった黒い血がな、ハハハハ……

カワシマ　（少年の姿から元に戻り）……お、お前はトシジ兄さんじゃない。すると、母さんも……誰だ、お前たちは誰なんだ！

タケと敏次、不気味な笑い声を残しながら、幻のように消えてしまう。
と同時に「怖がることはないわ、あなた」という声がし、血の色のように真っ赤なドレス姿のヤエが現れる。

カワシマ　……ヤエ！

ヤエ　（前に出て来てカワシマの手をとり）さぁ、あなた、踊りましょう……何も恐れることはないのよ。あなたは踊れます。あなたの身体は悪魔なんかに支配されてないんだから……さぁ、あなた……

タンゴの調べ。

カワシマの手をとって踊り始めるヤエ。
初めは身体のことを心配し、ヤエの動きに恐る恐るついていく感じだったカワシマも、踊りの動きが出来ることを知るや、ヤエと共にタンゴの調べに合わせてしっかりと踊り出す。
幻想的なヤエとカワシマのタンゴのダンスシーン。
ヤエの表情は妖しく美しく、カワシマは、厳しい中にも、身体にとり憑いていた悪魔から解放された安堵の表情が漂っている。
突然、ピーンという何か張りつめていたものが切れたような音がし、ヤエがカワシマからサッと離れる。
ヤエの手にはナイフ。
血が滴り落ちている。
だが、その血は黒い。
右肘の辺りを押さえているカワシマ。
同じように黒い血が流れている。

カワシマ　……ヤエ……どうしたんだ？　……いったい何が……

ヤエ、ナイフから滴(したた)る黒い血を舌先で嘗(な)め、床にナイフを突き刺し、クルリとドレスを翻(ひるがえ)して去ってゆく。
ヤエの名を呼び、追おうとするカワシマ。

――　追ってもムダよ、カワシマさん。

声がして、カワシマの映画に出たいといった少女がカワシマの後ろに現れる。

カワシマ　キミは……
少女　早く傷の手当てをしないと……
カワシマ　（傷口を隠し）たいした傷じゃない。
少女　……でも、黒い血はいけないわ。
カワシマ　（ギクッとし）なぜ……なぜ、キミはそれを？

少女　心配しなくても大丈夫。あなたが抹殺したがっている悪魔、その黒く濁った血も、もうすぐ消してしまうことが出来るわ……カワシマさん、赤い糸の伝説ってご存じ？

カワシマ　赤い糸？

少女　右足の小指には、生まれた時から眼に見えない赤い糸が結ばれていて、その一方は、将来自分と結ばれる相手の同じ足の指に結びつけられているの。そしてそれは、どんなに離れていても切れることはなく、絡みつくこともないのよ。

カワシマ　ナンセンスなセンチメンタリズムだ……

少女　そうかしら……あたしはとてもロマンチックな話だと思うわ。

カワシマ　そんな話と、私の血とどういう関係があるというんだ！

少女　まだ、わからないの？　濁りきった黒い血を抹殺（まっさつ）するために必要な真っ赤な血、赤い糸、そして、ここにいるあたし……謎解きドラマは苦手なようね、カワシマさん……

少女は、ヤエが床に刺したナイフを抜き、カワシマに近づいてくる。

カワシマ　……わかったぞ、何もかも！　やはりあの折居とかいう男は悪魔なんだ！　そして、この私を地獄に誘い込もうとしている。いろんな手を使って……くそっ、何も母さんや姉さんまで引っ張り出すことはないじゃないか！　その上、ヤエまでも……キミだってどうせあいつの仲間なんだ、そうに違いない！

少女　……違うの……お願い、あたしの話を聞いて……

カワシマ　残念ながら私はそう簡単にはくたばらない。まだやることはたくさんあるんだ。

少女　あなたを助けてあげることが出来るのは、このあたしだけなの！

カワシマ　……なぜ……なぜ、キミがこの私を……

少女　カワシマさん、あなたにもう疑問符はいりません。

少女が何かの合図のような仕種をしながら、「ナゼ、ドウシテ、ドレ、ドコ、ダレ、イツ、ドノ……」と疑問代名詞や疑問連体詞、疑問副詞などを呪文のようにいっている間に、人形のような黒衣（こくい）たちが次々と現れ、カワシマの身体に赤い糸を巻きつけていく。

カワシマは、少女に助けを求めようとするが、動くことが出来ない。

少女　（カワシマにナイフを渡し）……カワシマさん、あなたはその運命の赤い糸に絡まれながら解放されていくの。あなたの中の悪魔は、それで完全に消えてしまう……さぁ、あたしが《時》を数え、八点鐘が鳴り響き、あなた自身が悪魔から解放されたと感じた時、そのナイフで、すべての赤い糸を断ち切るのよ！

激しい風と呪術的な音楽の盛り上がりと共に、黒衣たちはカワシマの身体に巻きつけていた赤い糸をピーンと張る。

それはまるで、カワシマの身体から真っ赤な血が何本も噴き出しているかのようにも見える。

黒衣たちは、赤い糸を操りながら、官能的な激しい動きをする。

少女の《時》を数える声。

続いて鐘の音。

そして、数え唄の時、もうひとつの世界である暗闇の中、勢いよくマッチが擦られて火が灯され、亡霊としての、母や兄、さらには〈ラビリンス〉の人々が浮かび上がる。

その顔はみな、気味の悪い微笑を浮かべている。

ひとぉーつ　ひと夜夢見に影が射す
ふたぁーつ　ふたなり面の化け烏
みぃぃーつ　道行　暗黒　地獄絵図
よおぉーつ　酔いどれ船が帆を上げる
いつぅーつ　愛し恋しや恐山
むうぅーつ　無情　血の雪　乱れ舞い
ななぁーつ　泣けど叫べど回り独楽
やあぁーつ　闇の彼方へ消え去りぬ！

黒衣たちの乱舞。

しばらくするとカワシマは、それに逆らう力を持ち得たように赤い糸をたぐり寄せ、少女に渡されたナイフで次々と赤い糸を断ち切ってゆく。

すべて切り終えたカワシマは、少女に近づく。

カワシマ　ごらんなさい、運命の赤い糸はすべて断ち切った。そして、この身体……悪魔はもう死んだ……（笑いながら）まるで冒険活劇の主人公にでもなったような気分ですよ。謎解きの推理ドラマも少しは理解出来たようだ。私が主人公、そして、君がヒロインだったとはね……

少女を抱きしめるカワシマ。

突然、鋭い悲鳴とともに真っ赤な血しぶきがカワシマの首から吹き上がる。

血に染まったナイフを手にしている少女。

カワシマは首を押さえたまま少女から離れる。

少女　謎解きドラマには、必ずドンデン返しが付き物なのよ、カワシマさん。でも、ごらんなさい、あなたが恐れていた因果応報の濁りきった黒い血は、見事な赤に変わったわ……さぁ、安心してオヤスミナサイ。そして、夢の続きを……

一陣の風が吹き、ゆっくりと、暗転――――

6　魔月銀幕館（まげつキネマ）

完全暗転の大暗黒の世界に妖しい光が明滅し、夢先案内人による歌がどこからともなく聞こえてくる。

ルーララ　ルーララ　ルーラルル
戯れに触れた迷宮（ラビリンス）　それは銀幕（キネマ）の夜
人生（ライフ）という名のスクリーン　それは光と影
魔の月浮かぶ舞踏会　ステップ踏めば　今宵は永遠（とわ）のさすらいゲーム
ルーララ　ルーララ　ルーラルル
サヨナラの始まりは突然の訪れで　未来は妖しき過去を彩る

生きいそぐ時　人は闇を探し求め　飽くことのない夢を見続ける
そしてまた　今日も銀幕（キネマ）に愛のオマージュ
そしてまた　明日（あす）も銀幕（キネマ）とひと夜のデュエット
ルーララ　ルーララ　ルーラルル

ボーッと明るくなると、いつのまにかそこは、小さな古びた映画館である。スクリーンに映し出される映画（昔の白黒の時代劇などがよい）を見ている何人かの客。

椅子はところどころ壊れ、映画には、いわゆる雨（ノイズ）が降っている。

そこから少し離れた場所に、ディレクターズ・チェアに座っているカワシマがいる。

カワシマ　……夢を、悪夢を見ていたようだ……だが、どこまでが夢で、どこからが現実か？　いや、そんなことはどうでもいいことだ。ひと夜の夢、そう、こんな夢もあったな……野辺地村のはずれにあった小さな映画館、グリーン座の、前から三列目、右から八つ目の席が、私の指定席だった。そこだけクッションがなく、私以外には誰も座ることがないような小さく固いその席で、私は一体いくつの夢を見たことだろうか……そしてまた、この椅子で今、私は夢を見続ける。いや、夢を創り出していかなければいけないんだ……

映画に見入っていた客たちが、ひとりひとり前に出てきて、映画に対する思い出や思い入れを話し始める――それは、実際にこの場で観客の役を与えられた役者自身の言葉によって語られてもよい。つまり、それぞれの役者自身の思い出話や思い入れが披露されるわけである。たとえば――

女優・Fの場合　……映画の思い出は、父や母の思い出ね。父は藤沢にあった日活の映画館の支配人をしていたんだけど、四歳の時に一度だけ連れてってもらって、そのとき見た、映画館の中の真っ赤な絨毯や、階段の上に飾られた石原裕次郎や浅丘ルリ子なんかの日活スターのパネルの数々。今でもはっきり覚えているわ。母は洋画が好きでね、四人姉妹の末っ子の私だけ連れて出かけるの。それから、家にあった『映画の友』

っていう雑誌で見た、ナタリー・ウッドとかトロイ・ドナヒューの、ハリウッドのスターたちのステキなドレスや大邸宅……まるで別の世界のようだった……

男優・Tの場合　……僕が物心ついてひとりで映画を見始めた頃、町には二つの映画館があった。ひとつは坂本座といって主に成人向けの映画をやってててね、学校の帰り道、その前に飾られた女の人の裸のスチール写真を盗み見したりして、人がくるとサッと走り去る。もうひとつのオデオン座は怪獣映画をよくやってて、日曜ともなると、小学生の列がズラッと並んだものだったな。僕が好きだったのはガメラシリーズで、『ガメラ対ギャオス』は三回も観たっけ。ギャオスに顔が似ている久保君は、いまだにみんなからギャオスと呼ばれている……

もちろん、これらの言葉を借り、いくつかのキャラクター分けをした上で、新たに構築し直すことも可能である。

男女ふたりずつぐらい終えたところで、カワシマが顔を上げ、話し出す。

カワシマ　……ひと夜の夢、銀幕（キネマ）。その夢を見るにしても、創り出すにしても、それはかくもいとおしい旅……そして、私のこの不思議な迷宮の旅も、もうしばらく続きそうです……

カワシマのどこか遠くを見つめるような眼。彼が見るものは――

7　質料（マテリー）の肖像

そこは、とある街角。

雨が降っている夕方。

洋装の喪服姿の女がひとり、傘をさして立っている。

そこに、傘もささず、コートの襟を立てて走ってくる男がいる。

〈週刊新報（しゅうかんしんぽう）〉の記者・沖田である。

沖田は、女に声をかける。

沖田　……すいません、浄門院へはこの道でいいんでしょうか？　……奥さん！　カワシマさんの奥さんじゃないですか！

女　……

沖田　沖田です、〈週刊新報〉の。いやぁ、先日は失礼しました。いえ、あの、御主人、こんなに容態が悪かったなんて知らなかったもんですから……

女　……人違いですわ。アタクシ、カワシマさんの奥さんじゃありません。

沖田　またぁ、冗談はやめてくださいよ。喪服を着ていらっしゃるじゃありませんか。

女　えぇ、確かにカワシマさんのお通夜には参りましたわ。でも、アタクシは……あっ、浄門院でしたわね。それでしたら、ここをまっすぐ行って、花屋さんの角を左に

――――

沖田　ちょ、ちょっと待って下さい。僕のこと、覚えてませんか？　新米の記者だって、あなたに笑われた……

女　ごめんなさい。アタクシ、あなたにお会いした覚えありませんわ。

沖田　しかし、どこからどう見てもカワシマ夫人のヤエさんとしか……（よく見ようとする）

女　すみません。アタクシ、これから行くところがありますので……

沖田　あっ、やっぱりあなた、ヤエさんじゃありませんか！

女　違うっていってますでしょ。

沖田　いや、証拠があります。

女　ショウコ？

沖田　その、首のところのホクロです。

女　ホクロなんてあったかしら？　（と、首の辺りを触る）

沖田　そのホクロです。僕はちゃんと覚えてるんですよ。こう、やけに色っぽいホクロだなぁって見とれてしまって……いや、すみません。それが証拠だ。

女　アタクシ、自分で見たことないからわかりませんわ。

沖田　鏡は持ってないんですか？

女　えぇ、主人が嫌いなもので……

沖田　カワシマさんが？

女　違いますわ！

沖田　まぁ、見てごらんなさい……僕だって記者の身だしなみとして、新米でもクシと

か鏡ぐらいは肌身離さず……（と、手鏡を出し、女に渡す）

女　……どこかしら？

と、鏡を見た女の顔がキッとなり、次第に形相が変わってゆく。

そして、苦しみ出す。

沖田　……奥さん、どうしました？　……奥さん！　（突然ハッと気づき、女から離れ）……ま、待てよ……そうだ、確かに違う。ホクロは首の右側だった。左じゃなかった……ソックリだ、ホクロも、何もかもソックリ……だけど、違う……まるで鏡に映したように、逆なんだ、何もかも……

女　（苦しみながら）……あなた……なぜ、あたしを置いて……あたし、もっと勉強します、本も読みます、映画も見ます……だから、お願い……行かないで、ひとりで……あなた……

沖田　どういうことだ……この人はやはりヤエさんなのか？　いや……しかし……

そこにいつのまにか、迷宮売りの男が現れている。

迷宮売り　……どうやら、あなたは見てはならないものを見てしまった、いや、見せてしまったようですね……この世がひとつの流れしか持っていないと思うのは、大きな間違いです。前と後ろに表裏（おもてうら）、右と左、上と下、それらはみな裏返してみれば逆もまた真（しん）なり。さらにそれらの流れが入れ代わったとしても、そこには紛れもない真実がある。現実のみに生きること、つまり、鏡の中の自分しか知らないようなあなたには、まだそれらを理解する力、真実を見る力は備わっていないようだ……

沖田　あ、あんた、一体何をいいたいんだ！　僕はまだ新米だけど、これでも記者の端くれだ。真実を伝えるという使命、記者魂ってのは持ってるんだ！

迷宮売り　魂はもちろんお有りでしょう。だが、伝えるべき真実とやらは、そう簡単に理解出来るものではない。お教えしましょう、真実というものがいかなるものか……（沖田に新聞を渡す）それは明日の朝刊です。二十一面の下の記事を見てごらんなさい。

沖田　……（読む）「週刊誌記者、通夜の席で変死！　十二日午後六時十分ごろ、東京港区芝の浄門院で執り行われていた、十一日死去した映画監督カワシマユウゾウさんの

通夜に訪れた〈週刊新報〉記者、沖田恭一さん（二三）は焼香の最中いきなり吐血し、その場に倒れ込んだまま――――」（新聞をまるめ）冗談がきついよ、あんた。こんな非現実的なこと信じられるか！

迷宮売り　現実と真実は違うものといったはずです。その記事にあるように、あなたはこれから通夜に行き、焼香の最中に変死をとげる。

沖田　バカバカしい……

迷宮売り　だが、あなたには、ひょっとしたらという思いが芽生えている。信じられないまでも、行くのはやめようか、という気持ちに傾き始めている。しかし、それは無理というものです。あなたは行く。そして、死ぬんです。そこで初めてあなたは真実というものを知るんだ……

沖田　……いや、僕は死なないね！　あんたのいうように行ってやろうじゃないか。そして、戻ってくる、ここにね。必ず戻ってくるぞ。だから待ってろ、ここから一歩も動かずに待ってろよ！　どこのインチキ占い師だか知らないが、その大きな口を叩きのめしてやる！　（と、走り去る）

迷宮売り　……かわいそうに……しかし、これもひとつの運命（さだめ）。運命（さだめ）こそが真実と、気がつく時にゃ、もう遅い、と……さてさて、もうひと仕事残っていたな……

と、迷宮売りは苦しんでいる女に催眠術でもかけるかのような動きをして、静かに眠らせ、肩に担ぐ。

そして、「六／一二一八、六／一二一七、六／一二一六、六／一二一五……」と、月日と時間を（六月十二日午後六時から）逆行させる呪文を唱えながら去ってゆく。

同時に、時を刻む音が大きく広がってゆき――――暗転。

8　ギニョル幻視考

明るくなると、カワシマと折居がいる。

少し離れた場所に、黒い布が掛けられた何かがある。

そこは、バー〈ラビリンス〉であるようにも見える。

カワシマ　……折居さん、そろそろ本当のことを話して下さい。今まで起きたこと、あなたに見せられたことは、すべて夢の中の出来事なのかどうか……ふ、ふ、ふ、あまりいい夢とはいえませんがね……

折居　カワシマさん、もういいではありませんか。どこまでが夢で、どこからが現実か？そんなことはどうでもいいことです。

カワシマ　確かにそうかもしれない……だが、現に私はこうしてあなたと話していることで、自分が今まで一体何を見てきたのか、いろいろな考えが頭の中を巡(めぐ)っている。楽しかった思い出もあれば、この年になっての反省もある。それはもしかすると、現実以上に重要なことなのかもしれない。だが、これがすべて夢だとすると……

折居　夢を、馬鹿にしてはいけませんよ、カワシマさん。

カワシマ　わかっています。もうひとつの世界は確かにあるのかもしれない……ただ私は「これはすべて夢の出来事でした」という決着のつけ方は嫌いなんだ。だから、はっきりしたことを知りたいんです！

折居　……カワシマさん、あなた、人形はお嫌いですか？

カワシマ　いや……

折居　あなたの前に現れた少女、あれは実は、私が作った人形なんですよ。

カワシマ　あの少女が……人形……？

折居はニヤリと笑いながら、横に置いてあった何かの黒い布をとる。
と、それは紛れもなく、少女の等身大の人形であった。
人形は椅子に座っている。
カワシマは驚きのあまり声も出ずに、フラフラと後ろに下がる。
すると、何かにぶつかる。
そこには、人形のような、桐子や藤村、山尾たちが立っている。

折居　カワシマさん、あなた、以前、小さなギニョルの人形を大切にしてましたね……詳しいことは、人形たちの方がよく知っているでしょう……

人形の桐子　あなたが松竹大船撮影所に入ってまだ問もない頃、あなたは蒲田のとあるアパートの一室に住んだわね……

人形の藤村　その部屋の前の住人は中村登監督で、さらに前には吉村公三郎監督が住んでいた……

人形のマキ　彼らはその部屋に住むや、次々に監督としてデビューしていったわ……

人形の小田　不思議なことに、その部屋には代々、マスコットのような小さなギニョルの人形が飾られていた……

人形のみつこ　顔が蒼白く、目がギョロリとしたその人形を、中村監督は〈奇跡の人形〉と呼んでカワシマさんに譲り渡したの……

人形の矢地　くれぐれも大事にするように、と……

人形の山尾　でもまさか中村監督も、まだ若いカワシマ旦那が、そんなに早く監督になれるわけはないと思っていた……

人形の民子　ところが奇跡は三度起こったわ……

人形の佐久間　二十六歳という若さで、カワシマさんはその部屋から監督としてデビューしたんです……

人形の藤村　すべてはその人形のおかげと、師匠は人形をとても大事にしましたね……

人形の桐子　遊びにきた女の子が気味悪がっても、一番いいところにその人形を飾っていた……

人形の小田　カワシマさんはその人形を見ると、なぜかホッとしたんです……

人形の山尾　何か魅き寄せられるものがあったのね……

折居　……覚えておいででしょう、カワシマさん。その人形のことを。

カワシマ　……もう二十年近くも前のことだ。確かに私はその人形を大事にしていた。だがそれは、その人形が〈奇跡の人形〉だったからというだけではないんだ……

折居　……というと？

カワシマ　いや……いずれにしろその人形はすでにない。火事でそのアパートが焼けてしまったんだ。私は何より先にその人形を抱いて飛び出したが、途中で落としてしまい、人形は跡形もなく灰になってしまった……

折居　カワシマさん、その人形ですが……

折居は、どこからか小さなギニョルの人形を取り出し、カワシマに見せるように差し出す。

カワシマ　……（驚いて）これだ！　この人形に違いない！　（人形を受け取る）

折居　それも、私が用意したのです。いずれ、あなたの手に渡るようにとね。

カワシマ　……あなたは、やはりただの人形作りではない！

折居　フフフ……結構、あなたの中にすでに疑問符はないようだ。断定的な意見、多いに結構です。だが、その結論を出す前に、カワシマさん、その人形、誰かに似ていると思いませんか？

カワシマ　（人形をよく見て）……私か……私、ですね……これは、この人形は、私だったのか……（突然、人形の手足をバラバラにし、人形を見つめる）……これが、今の私の姿です！

折居　（それらを拾い集めながら）ひどいことをする……カワシマさん、何をそれほどまでに恐れているのです？

カワシマ　私は恐れてなどいない！　ただ、今の私は、その人形のように手足をもがれても、何も抵抗できない存在になってしまったといいたかったんだ！

折居　そうでしょうか？　あなたには、まだまだこれからやってもらわなければならないことが、たくさんあるのですが……それに、人形には血は通っていないが、カワシマさん、あなたの身体には、真っ赤な血が流れているのではありませんか？

カワシマ　ふ、ふ、ふ……私は今まで人形という存在を愛していた。例の〈奇跡の人形〉だけでなく、いろいろな人形をね。それは、人形という存在に憧れていたからだ。血の通っていない人形に、血という悪魔に縛られない存在になりたかった……私は、人形になりたかったんだ！

折居　だが、今はもう違う。カワシマさん、眼を覚ますんです！　あなたはもう、人形に憧れる必要はないんだ！

突然、人形の桐子や藤村たちが、喘ぎ声をあげながら、身体の各部分が崩れていくように苦しみ出す。

折居　ごらんなさい、この人形たちはまもなく滅ぶ。そして、その後には何も残らないのです。

カワシマ　それは人間だって同じだ！　いつかは死ぬ。滅びゆくんです。生まれた時から死に向かって歩いているようなもんです。この私なんか、見て下さい、この身体を…

…人より歩くのが遅いくせに、死の入口は、すぐそこまで来てるんだ！　そして、死んだら何も残らない……

折居　いや違う！　いいですか、カワシマさん、人形になくて人間にあるもの、それは、《魂》です。肉体は滅んだとしても、人形と同じようにその形はなくなっても、魂は、永遠の存在としてあり続けるんです！　（意を決したように少女の人形に近づき、マッチを擦って火をつける）

燃え上がる少女人形。

カワシマ　（折居を引き離し）折居さん、何をするんです！

折居　カワシマさん、よく見るんです。人形は燃えて跡形もなくなってしまう。そこには魂のカケラすら残らない。だがあなたは、あなた自身の魂の存在を知ったはずなんだ！

ところが、燃え上がる少女の人形は、突然、不気味な笑い声をあげ、ゆっくりと前に出てくる。

同時に人形の桐子や藤村たちも、苦しみから解放されたように、カワシマと折居に近づいてくる。

遠くに迷宮売りの姿が浮かび上がる。

迷宮売りは笑っているようにも見える。

折居　……これは、どういうことなんだ……

カワシマ　折居さん、この人形たちは……？

折居　……そうか……カワシマさん、私はもうあなたに何もしてあげることは出来ないでしょう……しかし、もう大丈夫だ。これでいいんです。人形たちがこうなったのも、あなたの意識が変わったから……あなたが目覚めたからなんです！

いきなり少女の人形が折居の首を絞め上げる。

「折居さん！」と叫んで折居を助けようとするカワシマも、人形の桐子たちに身体を押さえつけられ、ディレクターズ・チェアに座らされてしまう。

カワシマ　折居さん！

折居　カワシマさん、疑問符はいけません！

カワシマ　いや、折居さん、最後の質問だ！　あなたは……あなたは、一体誰なんです？

折居　……あなたの、もうひとつの魂！

カワシマ　……折居さん！

もの凄い勢いで風が吹き、辺りは一瞬のうちに大暗黒の闇に包まれる――

9　眠りからの帰還

ゆっくりと明るくなると、そこは、バー〈ラビリンス〉。

ディレクターズ・チェアで座って眠っているカワシマの周りに、桐子、藤村、小田、山尾、佐久間、そして、カウンターの中に谷地がいる。

桐子　……珍しいわね。カワシマちゃんがここで酔いつぶれるなんて。

藤村　いや、今日は師匠、それほど飲んでませんから、酔ってはないと思います。

山尾　きっと、疲れてるのよ、旦那。このままにしといてあげましょう。

みんな頷いて、そっと離れる。

佐久間　ああいう寝顔は、奇才と呼ばれてはいても、可愛いものですねぇ。あ、すみません。

山尾　（笑って）いいのよ。

小田　……あのぅ、これは、実際に見たって人から聞いた話なんですがね、カントクのデビュー作『還(かえ)って来た男』の原作者である織田(おださく)作が、すごい喀血(かっけつ)をして亡くなった時にね、虎ノ門だかの病院に、カントクが、銀座にあるだけの薔薇を買い込んで抱えていったそうなんですよ。

山尾　すご～い！

桐子　銀座の薔薇は高いわよ。

藤村　織田作とは仲が良かったですからね。

佐久間　日本軽佻派ですね。

桐子　楽しそうだったわよね。

小田　で、話はそれだけじゃないんですよ。すごい数の薔薇を抱えて病院に行ったんだけど、時間が遅かったので中に入れてくれないわけですよ。しかも、織田作も救急車かなんかで担ぎこまれたもんだから、表からじゃなく裏から入れられて、鉄格子みたいのがはまっているような暗い部屋で、亡くなるんです。一月十日。その日は霙が降っていたらしいんですが、そんな中で、カントクは、その赤い薔薇を抱えて座りながら、その薔薇を全部食ったというんです。なんかブツブツ文句をいいながら、一枚ずつ食ったと。……その話を聞いた時、僕は背筋が寒くなりながらも、カントクのダンディズムってやつを感じました。

みんなでカワシマを見つめる。

すると、カワシマがクシャミをして、目覚める。

カワシマ　……ん、誰か、私の噂、しましたか？

みんな、笑顔で首を横に振る。

山尾　カントク、よく眠れた？

桐子　カワシマちゃんたら「飲み直しましょう！」って自分でいっといて、急に眠り込んじゃうんだもん……ホントにしょうがないわね。

藤村　心配しましたよ、師匠……

カワシマ　心配には及びません。私は至って健康……そうだ、藤村クン。折居さんは？（立ち上がってキョロキョロする）

藤村　はっ？　誰です？

カワシマ　ほら、人形を作っているという……

桐子　何いってんのよ、カワシマちゃん。残っているのはこれだけ。もうとっくにお店を閉める時間も過ぎちゃったのよ……

藤村　みっちゃんやマキちゃんたちも、残しちゃかわいそうだから先に帰ってもらいましたよ。

佐久間　ボクたちだけですよ、カワシマさんか起きるの待ってたのは……

カワシマ　いや、だから、そのみっちゃんたちがいた頃に客でいただろう、サングラスをかけた……

小田　こうですか？　（と、胸元からサングラスを取り出してかけ、怪しいフランス語の歌を歌う）

カワシマ　（クックッと笑いながら）ちょっと違いますな。

桐子　今日はそんなお客さんいなかったわよ。

カワシマ　しかし、一緒に酒も飲もうとしたし、件の芝居だって見たと――

カワシマ、急に黙り込み、何かに気がついたようにニヤニヤと笑い出す。

桐子　どうしたの、カワシマちゃん？

カワシマ　（ひとりごとで）ふ、ふ、ふ……そういうことですか……どこまでが夢で、どこからが現実か。なんて、はっきりしてるじゃござんせんか……折居さん、ねぇ……やけにシビアな夢を見せてくれたもんでげすなぁ……

桐子　やぁねぇ、ひとりごとばっかり……

藤村　師匠、夢見てたんですか？

カワシマ　どうもそうらしい……だが、キミらが見るようなイヤラシイ夢ではない。もっと人間形成の奥深いところに根差（ねざ）した、すばらしい夢でげす。

藤村　ネ、ですか？

カワシマ　そう、根です。根差す。根で差す。

藤村　寝て、刺す？

カワシマ　バカモン！　誰が「寝て刺す」といいましたか、このドスケベが！

桐子　もう、藤村君たら……

藤村　いえ別に、僕は……そんな、ワケでして、へへへへ。

みんな笑いながら、楽しく盛り上がる。

カワシマ　さて、それでは改めてお酒をいただきましょうか！

桐子　カワシマちゃん、今日はもうよした方がいいわ。水割り二杯で倒れちゃうんですもん。元気そうに見えるけど、どこか身体の調子悪いのよ、やっぱり……

カワシマ　マダーム、ご心配大いにありがとう。そのヤサシサ、死んでも忘れませんぞ。

桐子　やよ、「死んでも」なんて、縁起でもない。

カワシマ　そのヤサシキ心をもってですな、全員に最後の一杯を！

桐子　……

カワシマ　わかりました。ホントにこれでお開きにするでげすから、ね！　（と、マダムの尻を触る）

桐子　はいはい、元気なのはわかったわ……本当にこれが最後よ。

桐子、バーテンの谷地に命じて水割りを人数分作らせる。

全員、水割りのグラスを持つ。

カワシマ　……それでは、ここで今宵はお開きということで……

みんなが何事かと待っていると、カワシマは朗々と、とある漢詩の一節を語り出す。

桐子　なぁに、それは？

カワシマ　于武陵（うぶりょう）『勧酒（かんしゅ）』、井伏鱒二（いぶせますじ）・訳。

カワシマ以外の全員が、同じ一節をしみじみと語る。

それを見て、ニヤリとするカワシマ。

カワシマ　さっ、みんなでグッといきましょう！

カワシマの音頭で、全員水割りを飲み干す。

カワシマ　ふ、ふ、ふ……さてと、吸収ばかりしてて排出の方を忘れるというのは、片手

落ちというもんでげすな。（藤村に）オマハン、便所に行きましょう、便所！

藤村　あ、いや、僕はさっき行ったばかりで……

カワシマ　そうですか……それでは桐子さん、御一緒にいかがですかな？

桐子　あら！　珍しいわね、カワシマちゃんがあたしのこと名前で呼んでくれるなんて……初めてじゃないかしら？

カワシマ　立派な名前があるのに「マダーム」ばかりじゃかわいそうでげすからな。もっとも、最初で最後ということも、傾向としてはありえます。さあ、桐子さん、便所へＧＯ！

桐子　待ってよ！　名前で呼んでくれるのはいいけれど、連れションはお断り！

カワシマ　しかしですな、排出という行為は自然の節理であって――

と、〈ラビリンス〉の電話が鳴る。

桐子　……何かしら、こんな時間に？　（絡むカワシマに）早く行ってらっしゃいよ！

カワシマ　……まったく、小便をバカにしちゃいけませんよ……（などとブツブツいいながら、小田に促され、トイレに向かう）

桐子　（受話器を取り）……はい、そうですけど……ええ、いらっしゃってますけど、今ちょっとおトイレに……何か？　……えっ！　（顔から血の気が引く）そ、そんな……

山尾　何かあったの？

桐子　……ヤ、ヤエさんが……

藤村　師匠の奥さんがどうしたんです？

桐子　こ、殺されたって……

藤村・小田　殺された？

桐子　……フィルムで……映画のフィルムで首を絞められて……

突然、カワシマの、喜びに満ちたような大きな笑い声がトイレから聞こえる。
飛び出してくるカワシマ。
その手には、少女の人形が――

カワシマ　（人形を抱きしめ）これは確かに折居さんの作ったという少女の人形だ！　あの人が私に見せてくれたものは、ただの夢じゃなかったんだ！

いきなり〈ラビリンス〉のドアがバタンと開き、その外に、着物姿のヤエが立っている。

カワシマ　……ヤエ！

ヤエ　……あなた、お迎えに参りました……外の雪は、もうすっかりやみましたわ……

カワシマとヤエだけに灯りが残り、桐子たちは消え、そこも〈ラピリンス〉ではなくなる。
静かな風の中、見つめ合っているふたり――

10　彼岸の断章

カワシマとヤエ。

ヤエ　……ユウさん、もうすぐですわね。

カワシマ　なんのことですか？

ヤエ　あなたの田舎へ、下北半島へ連れてってくれるって、ユウさん、約束なさいました。

カワシマ　今頃はまだ、辺り一面深い雪です。恐山もまだ閉山している。

ヤエ　雪ですか……あたし、雪が見たい。

カワシマ　そりゃ、東京で降る雪とは違いますが、積もったら積もったで大変なんです。

ヤエ　それでしたら、春になったら……

カワシマ　そうですね。春はもうすぐです。

ヤエ　（歌う）春よ来い、早く来い、歩き始めたみいちゃんが、赤い鼻緒のじょじょはいて、おんもへ出たいと待っている……

カワシマ　あなたが唄を口ずさむなんて、珍しいですね。

ヤエ　フフフ……いいでしょ、あたしだって唄ぐらい歌えるんです。

カワシマ　そりゃ、構いません。なんなら、わたしもひとつ歌いましょうか？　（歌う）
花も嵐も踏み越えて……

ヤエ　……ねぇ、ユウさん、かくれんぼしましょうよ。

カワシマ　かくれんぼ？　ここでですか？

ヤエ　そうです。さあ、早く……

カワシマ　しかし、どこに隠れりゃいいんですか、こんなところで……

ヤエ　あたしが先に隠れますわ。ユウさんがオニです。さぁ、目隠しをして。

カワシマ　ヤエさん、あなた、今日ちょっとおかしいですよ。

ヤエ　そんなことありません。

カワシマ　いや、おかしい。何かあったんですか？

ヤエ　何もありませんわ、なんにも……（しゃがみ込んで泣き出してしまう）

カワシマ　ヤエさん、どうしたんです？

ヤエ　お願い、あなた……かくれんぼしてくださいましな……かくれんぼしてください
ましな……

カワシマ　わ、わかりました。やります。かくれんぼでもなんでもやりますよ。

ヤエ　（サッと泣きやみ）それでは、あなたがオニです。あたしが隠れます。さ、早く。

カワシマ　はいはい……（目隠しをして）さ、いきますよ……もう、いいかい？

ヤエ　まぁだだよ……

ヤエ、しばらく隠れ場所を探している。
次第に辺りの様子が変わってくる。
風が強くなり、暗い雰囲気に――

カワシマ　もう、いいかい？　……もう、いいかい？　（答えがないので目隠しをはずす）
ヤエさん、どうしたんです？　探しに行きますぞ！　（と振り向くと、そこにヤエが
後ろ向きで立っている）ヤエ！

ヤエ　（後ろ向きのまま）……あなた、あたしもうだめですわ……

カワシマ　ヤエさん……

ヤエ　あなたとは住む世界が違うんです。

カワシマ　何をバカなことをいってるんです！　あなたは私の女房じゃありませんか。一緒です、何もかも。

ヤエ　……いいえ、違うんです。確かに今までのあたしは、あなたの世界について行こうとしていました。心をひとつにしようとも思っていました……でも、あたし……鏡を見てしまったんです。

カワシマ　鏡？　そんなもの誰だって見るじゃありませんか。何をいってるんですか。何か不満があるのなら、はっきりいって下さい。

ヤエ　あなたに対する不満なんてありません。

カワシマ　いいや、そんなこといってごまかさないで下さい……あたしがあなたに、これ読め、あれ読めって、本を押しつけたことですか？　行儀や家事や料理のことを口やかましくいったことですか？　……子供を作ろうとしないことですか？

ヤエ　やめてください、あなた！

カワシマ　……いいですか、私はどうせ長くないんです。子供が出来たらかわいそうだし、若いあなたは、これからまだ本当のお嫁さんに行かなくちゃいけないんだ。

ヤエ　……わかってます、あなたの気持ち……

カワシマ　あなたは、私の女遊びを病気だとかいいますが、あれは、元気なだけです。自分はまだ元気なんだということを確認して、安心しているんです。

ヤエ　もう何もいわないで下さい。わかっているんです、何もかも……ねぇ、ユウさん、覚えています？　前にあなた、「私は一緒に心中できるような女じゃないと、本当に愛することは出来ない」っておっしゃった……

カワシマ　そうです。しかし、それは、例(たと)えです。

ヤエ　いいえ、あたし、わかりましたの。鏡の中の自分しか愛していないような愛し方は、卑怯だ、って……あなた、あたしと死にましょう……

カワシマ　ヤエ！　何をいうんです！　私はまだ死にたくありません。あなただって、死ぬ必要なんかないじゃありませんか！

ヤエ　往生際が悪いですわよ、あなた……あたし、あなたを殺して、あたしも死にます！

ヤエ、サッと振り向く。

その表情はいつもの穏やかなヤエではない。

鬼のような形相のヤエの手には、映画のフィルムが握られている。

カワシマ　ヤエ！

ふたりの周囲に、仮面を被った亡霊たちが、衣装やメイク道具、小道具などを持ち、気味の悪い叫び声をあげながら、現れる。

カワシマ　……誰だ！　お前たちは誰なんだ！　……わかったぞ……お前たちだな。お前たちがヤエをこんな風にしてしまったんだな……誰だ、お前たちは！　（と、亡霊たちに飛びかかり、持っているものを取り上げる）……こ、これは、『夜の流れ』で司葉子が着た衣装だ！　（衣装を投げ捨て、次々と亡霊たちの持っているものを取り上げ）これは『女であること』の台本……この看板は『貸間あり』で使ったやつか……『雁の寺』の衣装……淡島千景のメイク道具……そしてこれは、『幕末太陽傳』の懐中時計！（自虐的な笑いをしながら）……そうか……そういうことだったのか……お前たちのその仮面、どこかで見たことがあると思ったが、ふ、ふ、ふ……みんな私の映画の登場人物たちじゃないか！

突然、ヤエがカワシマに飛びかかり、持っていたフィルムでカワシマの首を絞めあげる。

ヤエの狂笑。

カワシマ　うぅっ、ヤエ……こ、これは映画のフィルムか……わかったぞ、これが、このフィルムが、私を縛っていたのか！

ヤエ　あなたにこれを解くことは出来ない……

カワシマ　……ヤエ……お前はもう、私の愛したヤエじゃない。お前もこいつらと同じ、私の見た夢、いや、私が創り出した夢……フィルムに焼き付けた亡霊たちと同じになってしまったんだ！　……ヤエ！

カワシマ、ヤエを振り払い、逆に映画のフィルムでヤエを絞め殺してしまう。

ヤエの「あなた！」という断末魔の叫び声が響き、ヤエは崩れ落ちる。

カワシマ　（大きく息をしながら）……私は今までこの血を、この身体を憎んできた。しかし、もっとも憎むべきものは……（映画のフィルムをかざし）お前だったんだ！　お前が、私とヤエの世界を壊した……お前は決して私にとって赤い糸なんかではなかったんだ！　（笑いながら）怖くなんかないぞ、少しも怖くない……たかだか水銀の光と影が焼きつけられたセルロイドの帯じゃないか！　しかも、私が、私自身が焼き付けたものだ……私は、映画が、フィルムが、銀幕（キネマ）が、憎い！　（フィルムを引きちぎる）後始末は自分でつけてやる！

カワシマはそう叫ぶと、ライターでフィルムに火をつける。
燃え上がるフィルム。
辺りに白煙が広がり、亡霊たちが叫び声をあげながら悶え苦しむ。
カワシマはさらに、衣装や小道具、台本などにも火を放つ。
そして、狂ったように笑いながら叫ぶ――

カワシマ　燃えろ！　燃えろ、私の銀幕（キネマ）！

亡霊たち、そしてカワシマも含めての、大滅亡の乱舞――

結　雪降るエデン

雪が降り続いている中、カワシマがひとりで立っている。
遠くの方に、哀しそうな眼でカワシマを見つめながら立っているヤエの姿がある。

カワシマ　……ヤエさん、ごらんなさい、雪です。もうすぐ春だというのに……東京で見る最後の雪でしょうね……そうだ、あなたを下北半島へ連れて行ってあげるの、春になったら、と約束しましたが、やはり冬のうちに行きましょう。あなたに下北半島の雪を見せてあげたい……向こうではね、雪が下から上に舞い上がるんです。いえ、本当のことですよ。雪が軽いんですね……身体ですか？　心配はいりません。雪ぐらい

じゃびくともしませんよ。それに、私はもう身体のことをとやかくいうのはやめたんです。ようは生き方です。生き様です。なんて、ね。（笑う）さぁ、行きますか……（と、歩き出すが、突然、胸を押さえて立ち止まる）……なぁに、なんでもありゃしませんよ。なんでも———

カワシマ、立ち止まったまま動かなくなる。
雪は、何事もなかったように降り続く———
どこからともなく『川島雄三・頌（しょう）』を語る声が聞こえてくる。
それは、カワシマとヤエ以外のすべての登場人物たちによって、ひとりずつ順番に語られる。

雨にも負けず　風にも負けず
徹夜にも　尻カッチンにも負けぬ
心臓以外は全部丈夫な身体をもち
古くてガサツな押しつけには
あく迄抵抗する魂をもち
数奇で優雅な映画を造りたいと願い
酔っぱらう時はとことん迄酔っぱらい
（しかし女の子にはあく迄やさしく）

いやな野郎にカラんでカラんでカラミ倒し
とうふと梅干しとらっきょうを好み
能書を並べ乍らげてものを喰い
新薬とせんじ薬（くすり）を交互に飲み
あらゆる新刊書を人知れず読み
（しかし女の子にはあく迄やさしく）

上野と浅草と銀座と祇園を愛し
時に岡場所をも愛し
どの道が一方通行かをよく知り

ポラロイドキャメラでヌードを撮り
酸っぱい匂いの定着液でこすって皆に配り
（しかし女の子にはあく迄やさしく）

高層アパートの九階のはずれに住んで
美人の奥さんを誰にも見せず
エレベーターで昇り降り
東に飲みたいという人があれば行って飲ませてやり
西にパーティがあれば行って顔を出し
会魔と云われ乍ら　自己宣伝を嫌い
そういうことをする奴を憎み
呎（フィート）の都合で監督マークを長くすると
死ぬ程嫌がり
（しかし女の子にはあく迄やさしく）

徹底的にいきがり
徹底的に恥ずかしがり
くだらない映画と　いい映画をつくり
積極的逃避などといって人を煙にまき
口をとんがらして怒り狂い
小さい声でクスクス笑い
（しかし女の子にはあく迄やさしく）

やまとたけると弁慶と写楽を愛し
大地に爪あとを残して死ぬんだといい
休まず　はげしく　すきまなく生き
疲れ果てると　サヨナラだけが人生だとも云わずに
自分でも気づかずに死んでしまい
みんなをびっくりさせ
死に顔は寝顔よりもやすらかな

そんな生き方と
そんな死に方をする人に
（私たちはなりたい）

カワシマと、その姿を遠くで見つめているヤエを残して、ゆっくりと暗転。
やがて、すべての灯りも消えたところに――
「カーット！　ＯＫ！」と大きな声が響く。
華やかな音楽と共に明るくなり、すべての出演者とスタッフたちが、にこやかに舞台の前に集まって来る。
そして、そこに『カワシマ組　銀幕迷宮　―キネマラビリンス―　○月○日』と書かれた看板が運び込まれ、それを前に置いて、みんなで記念写真を撮る。
記念写真はそのまま活人画となり、やがて、暗転――

［了］

回参考文献

・『サヨナラだけが人生だ』映画監督川島雄三の生涯』今村昌平編（ノーベル書房）
・『ミューズの蹠（あし）―川島雄三の生と死―』映画監督川島雄三を偲ぶ会編
・『ＫＡｗＡＳＨＩＭＡ　ＣＬＵＢ―鬼才！　監督川島雄三の魅力―』
・『生きいそぎの記』藤本義一著（講談社）
・『ユリイカ臨時増刊　総特集・監督川島雄三』（青土社）
・シナリオ『幕末太陽傳』
・『神曲』ダンテ、寿岳文章訳（集英社）

――深謝。